新婦人協會
機關雜誌

女性同盟

10

七月號

□第一回總會に臨み過去一年半を回想しつゝ……らいてう
□現代と團體生活……山田わか
□最後は唯一つ……佐々木伊都
□綱紀振肅……奥むめお
□特殊部落婦人の覺醒を望む……山田美都
□婚姻の性質と貞操蹂躙問題……布施治
□來るべき時代の女性……ベエベル
□婦人運動と議會政策其他……土田杏村
□婦人運動の倫理的特色……一條衛
□將來の婦人運動と新婦人協會……奥英一
□婦人運動の物理的條件……長谷川如是閑
□須磨子、鎌子、榮子……胡床
□綠の窓より（感想）……鈴木紅美
□女流詩人（評論）……今井雄二
□忘れ得ぬ人（小說）……三宅やす子



女性同盟

第十號目次

第一回總會に臨み 過去一年半を回想しつつ……らいてう……二
現代と團體生活……山田わか……八
時事批判
最後は唯一つ……佐々木伊都……一三
綱紀振肅……奥むめお……一六
特殊部落婦人の覺醒を望む……山田美都……一八
婚姻の性質と貞操蹂躙問題……布施辰治……二一
來るべき時代の女性……アグスト・ベエベル……二六
□御挨拶……市川房枝……三二
婦人運動批判
婦人運動と議會政策其他……土田杏村……三三
婦人運動の倫理的特色……一條忠衛……四三

將來の婦人運動と新婦人協會……………………奥　　英　一…四三
婦人運動の物理的條件……………………長谷川如是閑…四七
□問に答へて
信じ得ざる男子との結婚……………………本郷の一女子……五一
□海内婦人會……………………五三
□海外婦人會……………………五四
須磨子、鎌子、榮子……………………胡　　　　床…五五
綠の窓より（感想）……………………鈴木紅美…五九
女流詩人（評論）……………………今井雄二…六三
忘れ得ぬ人（小說）……………………三宅やす子…七一
▲會務部通信……………………七九
▲協會日誌……………………七九
▲總會記事……………………八〇
▲編輯だより……………………八二

新婦人協會綱領

一、婦人の能力を自由に發達せしめるため男女の機會均等を主張すること。

一、男女の價値同等觀の上に立ちて其の差別を認め協力を主張すること。

一、家庭の社會的意義を闡明すること。

一、婦人、母、子供の權利を擁護し、彼等の利益の增進を計ると共に之に反する一切を排除すること。

新婦人協會宣言

婦人も亦婦人全體のために、その正しき義務と權利の遂行のために團結すべき時が來ました。今こそ婦人は婦人自身の教養、その自我の充實を期するのみならず、相互の堅き團結の力によつて、その社會的地位の向上改善を計り、婦人としての、母としての權利の獲得のため、男子と協力して戰後の社會改造の實際運動に參加すべき時であります。若しこの時に於て、婦人が立たなければ、當來の社會も亦婦人を除外した男子中心のものとなるに相違ありません。そしてそこに世界、人類の禍の大半が置かれるのだと思ひます。

私共は日本婦人がいつまで無智無能であるとは信じません。否、既に我が婦人界は今日見るべき學識あり、能力ある幾人かの新婦人を有つてゐます。しかも私共は是等の現はれたる婦人以外に、なほ多くの更に識見高き、思慮あり、實力ある隱れたる婦人のあることを疑ひません。然るに是等の婦人の力が一つとして社會的に若しくは社會的勢力となつて活動して來ないのは何故でありませう 全く婦人相互の間に何の聯絡もなく、各自孤立の狀態にあつて、少しもその力を婦人共同の目的のために一つにしやうといふやうな努力もなく、又そのための機關もないからではないでせうか。私共はさう信ずるものであります。是れ私共が微力を顧ず、同志を糾合し、茲に婦人の團體的活動の一機關として「新婦人協會」を組織し、婦人相互の團結を計り、堅忍持久の精神を以て、婦人擁護のため、その進步向上のため、或は利益の增進、權利の獲得のため努力し、その目的を達せんことを期する所以であります。

大正九年三月二十八日

女性同盟



第十號

第一回總會に臨み 過去一年半を回想しつつ

らいてう

「何といふ忙しい、何といふ落付のない、何といふ慌しい、何といふ無理の多い、何といふ過勞な年であつたらう。」

第一回の總會に臨み、協會創立以來今日まで――過去一年有半を回想して何はさておき先づ第一に私の口から自然にこぼれ出る最も卒直な言葉はこれだ。

外部からの觀察や批評がどうであらうとも、私は確に自分達はあまりに多くの仕事を慾張り過ぎ、あまりに早くその仕事の具體的功果をあせり過ぎたと言ひ切ることが出來ると思ふ。

私一個に就いて考へて見ても、自分の半生を通じて、これほど忙しい、朝となく、晝となく、夜となく追つかけられ、せき立てられてゐるやうな生活がいつあつたらう。思想することも、思想をまとめることも、觀念することも、讀むことも、書くことも、人を愛することも、子供達と遊ぶことも、何といふことなしにこの書齋の窓から谷中の塔や上野の森や、八幡の公孫樹の大樹や、空や、雲を眺めてゐることも、なほそれ以上肉體に必要な睡眠さへも十分與へられない生活、しかも物質の窮乏にこれほど惱まされ通した生活、こんな生活が嘗てしばらくでもあつたらうか。私はかうした生活の中で自分自身を殺すことのあまりに多くなつた自分を見て驚くことも屢々であつた。主婦であり、母である自分の連日の外出が目に見えて家庭を落付きのない、荒廢したものにする事や、夫や子供の顔に淋しさの影を讀むときなどは十分豫期してゐたにも拘はらず、矢張り自分にとつては可成り苦しい矛盾であつた。又時とし

美しさも、純粹さも、こまやかさも、暖かさも、柔かさも、のびやかさも、愼ましやかさも、否人間がもつてゐる一切の人間らしい、女らしいデリケートな資質が踏みくだかれつゝあるのではないか――かういふ不安と疑惧の念に戰慄した事も二度や三度ではなかつたことも私は正直に言はねばならない。しかもこれは恐らく私一人ではなかつたらう。

それなら個人生活の上にこんな犧牲を餘儀なくした忙しさは、團體生活にとつてはどうであつたらう團體の力を信じ、その力によつてかういふ運動もしやう、あゝいふ運動もして見たいと、多過ぎるほどの慾望を協會の上にその成立に先立つてもつてゐた創立者が、協會が成立したかしないうちに、言ひ換へれば團體としてのほんの輪廓だけが出來たか出來ないうちに、性急にもその慾望の實現に着手し、外部に向つて交渉を開始したといふことも無理もないと言へば言へもしやう。併しこの運動なり事業なりは實はお前達が自身で考へてゐるやうな團體の力によつてしたのではなく、寧ろ團體の名によつてしたのではないかと言ふ人があつた時、これを否定し去る勇氣が私共にあるだらうか。

團體の力によつてではなく、寧ろその名によつてしたと言はれても仕方のない私共の仕事は、一度はじめられると、仕事が仕事を産んで、仕事に伴ふ雜務は私共の全精力を消費せずには置かなかつた。かうして私共は、ともすると、協會そのものが、言ひ換へれば團體の生命若しくは運命が、只是等の外部重視するや個々の仕事の上に托されてでもゐるかの如く誤信し、目前の又は外觀上の成功を急ぎ且つ過に現はれたうな傾向に走つた。

にかういふ際に、最も多くの危險と最も多くの誘惑の前に立たねばならないのは、所謂事業家とか活動家とか、働き手とか言はれるタイプの人だ。わけても是等の仕事が世間の注意を喚起するやうになり、絶えず大向の聲を耳にするやうになつてからは一層さうだ。何故なら、この種の人は大向を前に廻

し、外部に對して虛勢を張ることを、又さうすることによつて外觀上の盛大を世間に誇示することに心を奪はれ易いから。のみならずそこに會そのものゝ本當の盛大があり、又それが自分達の熱誠の表示であるかの如く世間と共に自身も誤信し、無意識のうちに一歩々々と所謂仕事屋に墮落しやうとする可能性をもつてゐるから。

　この傾向は協會を一個の健全な團體として、詳しく言へば輪廓ばかりの、形式ばかりの團體でなく、眞に團體的精神あり、生命あり、內容あるものとして、生長發達せしめる上の大きな障碍となつたことを、私は今更ではないが、この際特に深く感ぜずにはゐられない。社會的事業なり、運動なりをするといふことは團體がその目的を達成するためにしなければならぬ重要なことなのは改めて言ふまでもないことだ。併し團體が團體としての生命ある存在を保つためには、それと同時に、否それに先き立つて、團體そのものに對してしなければならない、もつと〳〵大切な、根本的な、目に見えない多くの仕事が團體內部になければならぬ。即ち團體の生命若しくは精神を作り、且つこれを育てるといふことである更に言へば團體そのものゝ根底を作るといふことである。

　ところが私共はこれに就いてどれ丈のことをしたらう。

　形に現はれた仕事にばかり心の總てを奪はれてゐた私共は目に見えない、しかしより重大なこの隱れた仕事を全然忘れてゐやしなかつたらうか。もしかう言ふのが誇張に過ぎるなら、心の總てを奪はれてゐなかつたとしても、又全然忘れてゐたのでなかつたとしても、全精力を傾けてもなほ足りないあの忙しさが、この方面に心を分ける丈の餘裕を私共に與へてくれなかつたことは確である。

　そしてこゝに團體としての第一の危險が、若しくは缺陷が潛んでゐたと私は思ふ。

かう考へてくるとき、私共は結局個人の生活を破壞し、犧牲にして、しかも團體生活をも本當には利することも出來なかつたことになる。

私共はこの點に就いて今十分反省しなければならぬところに立つてゐるのだ。

一體なら、この總會を迎へて、私共は協會が過去一年有餘の間にしたところの社會的事業なり、運動なりの意義や價値に就いて考へ、或はその成敗のあとを點檢して、將來の方策を定めるのが普通のことであらう。併し今日の協會に對しては、さういふことを私は故意と言ひたくない。何故なら協會の現狀を知つてゐる私は、寧ろ協會を、目に見えるもの、形に現はれたものより外見ること〻の出來ない所所事業家の手から救ひ、外にのみ奪はれて、何となく上調子に、粗野に、無作法に、荒んで行かうとする傾向の見えるこの私共の徒らに疲れた心を内に轉じ、眞の團體を作ることに、言ひ換へれば團體生活の根底である團體的生命を養ひ育てるといふ目に見えない第一歩の――併し今迄全く忘れられてゐた――仕事から今私共は出直すべき時だと信ずるから。

眞の團體を得るといふことに少しの努力も拂はないでゐて、只團體の作用の上にばかり多くを望んでもそれは無駄である。そこには不滿と、失望と鬪爭と、瓦解が待つてゐるだけだ。

幹部專斷といふことは我が國の殆ど總ての男女團體に共通な弊だが、これは團體生活が完全に出來てゐない證據なのは言ふまでもない。我が協會も亦同樣の非難を免れなかつたやうに思ふ。團體の力によつてではなく、團體の名によつて仕事をはじめたと言ふところに、抑々幹部專斷のはじまりがあつたかも知れない、又あまりに仕事に追はれ過ぎてゐて、會の機關を通して事をする時間の餘裕を與へられないため、止むを得ず專斷に流れるといふ場合が多かつたのは事實である。併し根本の原因は矢張り、會員相互間に團結がないところから、こまやかな神經が通ひ、血が流れて切つても切れないやうな密接な有機的關係が出來てゐないところから、從つて會員全體の統一された意志といふものがないところから

來た自然の結果ではないだらうか。又、かうして會員全體の意志の執行機關である、言ひ換へれば團體の單なる手足である筈の幹部が、事務員である筈の役員が同時に頭や胴をも兼ねるといふことによつて本當の頭や胴を一層血のまわりのわるい痺れたものにし、團體の平和な、健全な成長を益々妨げることにもなるのである。

日本人は團體的訓練がない、わけても婦人はさうだといふやうなことを世間の人達は言ふ。私共もこの點に於て悩まされることが多からうとは協會創立の最初から覺悟してゐた。さうして一年半の團體生活は私に次のやうなことを實感させた。

團體生活に於ては人は第一に自分と他人との相違を十分に意識してゐなければならぬ。人は各自に違つた素質をもち、違つた境遇に、違つた教育を受け、違つた感情、違つた習慣、違つた生活や氣分を有つてゐるので、決して自分と同じものにはならない。これはあまりに知れきつた事のやうだが、實際の場合には、私共はともするとこ忘れることがある。第二に他人の相違點を認めると共に、これを理解し、尊重し、包容する丈の寛量な心と濃やかな、行届いた愛とがなければならぬ。言ひ換れば、一切のものを肯定し、一切のものを自己の中に受容することの出來る藝術家の心がなければならぬ。——少くともその努力が必要である。第三に團體生活は個性といふ異る樂器が奏でる無數の異る音の複雜な調和と統一である一つの交響樂であることを知らねばならぬ。即ち是等の無數の音は、それを只一つだけ切り離して聽くとき、時には聽くに堪へないやうな騒音もあらう、又到底何とも調和しないやうな厄介な音もあらう。併しこれを全體として聽くとき、是等の音はその交響樂に一層の變化のある複雜な調和と統一を齎す上に必要な場合が少くない。團體生活の平和を破り、その調和と統一を亂すものは常に全體を見ることの出來ないものである。更に言へば全體を自己とすることの出來ないものである。

かういふ者のみ、部分を引離して來ては、それに對する好惡愛憎に囚はれたり、小善小惡に拘泥したり自他を比較して嫉んだり、羨んだり、競爭心を起したり、全體の功を自分一個に收めやうとしたり、自己の意見を固執して動かなかつり、それが通らなかつた場合は忽ち不快な顏をしたり、怒つたりするものである。この種の人は既に團體生活の第一資格を缺くもので、孤立の外ないのは言ふまでもない事だが、往々この種の小さな心と「熱心」とが同居してゐるのを見出すことのあるのを私は殘念な事に思ふ。

何はともあれ、生命ある團體を作り、その團體の力によつて成就しやうとする私共の仕事は容易なことではない。單なる一時の元氣や、意地や、張合や、反抗心や、名譽心や利害心などで出來ると思つたら大變な誤りだ。私共はさういふもの丶命の短いことを、頼むに足りないことを悟つた筈だ。

私は思ふ、この仕事は眞に同性に對する――同時に人類に對する温かな愛、と涙と、信仰と、深い洞察力をもつて、一歩、一歩と愼ましやかに歩むところの絶えざる、抑制された力の持續によつて成就するものだ。と

我が協會は今『待つことを知れ』といふ言葉の本當の意味を學ばねばならない時ではないだらうか。

現代と團體生活

山田わか

現代の特長は團體生活です。何にもかもが團體の力で押して行かなければ動きがとれないようになつてゐます。それで何々組合、何々協會と云ふものが後から〳〵設立されます。且つ又、一方から考へるならばどんな立派な考へが一人の人にあつても、もし、其れが多數の人の同意を得ないならば其の考へを實行に移すことが出來ません。

實に、團結の必要、其の力の有効さを旣でに〳〵認められてあつて、團結すると云ふことに付いては進んで賛成するのでありますが、併し、本當の意味の團結と云ふことは非常に難しいものです。なせなら、唯、人が集まつたからと云つて、それが直ちに團結ではありません。人が集まつただけでは仕事は進みません。其處で、私は今、多數と云ふことと、團結の代表として民主々義と云ふことに付いて少しく考へて見たいと思ひます。

民主々義は多數の勝利、則ち、多數決の政治だと一般に信じられて居りますが、併し、此の多數決と云ふことは、實は、民主々義の精神に添ふものでない、則ち、多數決は全部の意志を代表するものではないと思ひます。なせなら、全部の四分の三とか、三分の二とか云ふのですから、勿論、全部の意志を代表するものではありません。又、滿場一致ですらも全部の意志を完全に現したのでない場合もあるかも知れません。そんなら、何時全部の意志が完全に現はれ、代表されるかと云ふならば、それは全部の意志が融合して一つになつた時です。其の時の多數決が始めて民主々義の實現です。各人の必要と意志が現れて、其れが合して一つになつた時に其處に民主々義があるのです

民主々義を淺薄に考へる人は申ます。』勞働者達が、一朝彼等自身の力を自覺するならば勞働者は自分等の欲するものを、皆、自分のものにすることが出來る。なぜなら、勞働階級は、數に於てどの階級よりも大きい、そして、其の數の多いと云ふことが最大なる勢力であるから。』と。これは勞働者にとつては有利な意見でありますから、勞働者全部は直ちに其の説に共鳴する筈でありますが實際にはさうでないのは何故でせうか？　それは其の意見は眞理を語るものでない、則ち、數によりてのみ人は支配されるものではないと云ふことを彼等が無意識のうちに感じて居るからであらうと思ひます。

多數制と云ふことは、又、それ自身の性質によつて其れ自身を破壞してゐます。なぜなら、名は多數制でも事實は必ず少數制にならなければなりません。多數では餘りに數が多過ぎて仕末がつきません。其のために幹部が出來なければならず、又、幹部長と云ふものが出來なければならない、それならば、多數制ではなく、むしろ、一人制であにます。唯、多數の承諾を得た一人政治になつてしまふのであります。

産業に於ける多數制が、今、要望されて居ります。けれども、現に、存在して居るいくつかの勞働團體に於て、既でに、ことはいつも少數の人の意志によつて決定されて居ります。普選の運動と云へば、尾崎さんと云ふ普選の親玉が出なければならず、其の他民衆のため、則ち、多數のための運動には、必ず、其の運動の親玉が出なければ仕事は始まりません。

名は多數でも實質は少數制で、其の少數が權力を得よう、投票の數を多く得ようとするので、それが、區會、市會、國會、其の他あらゆる會の墮落の原因となつてゐるのであります。

成程、多數には力があります。けれども、其の力は其處に集まつた全部の頭數の力ではなく、其のうの幾部分かによつて構成された共通意志があるからです。多數の力と云ふものは、實に、其處に集まつた數から出來るのではなく其うちの幾人からか出來上つた共通意志にあるのです。政治上

多數を率ひ得ると云ふことは、一部力は勢の繼承一部は民衆の心を率くための宣傳の力、又、もう一部は社會の異つた思想と異つた力とを一つのものに融和し結合したもの、多寡によるのです。

ですから、人爲的な多數黨と云ふのは此の融和結合のない多數を意味します。此の種類の多數は當てにならない、今、多數でもいつ崩れ出るか分りません。其處で、人爲的の多數を擁すといふことは其れだけに全力を傾けなければならないので會の目的なる仕事をする餘裕はないと云ふやうなことになつてしまいます。從つて、そう云ふ會は利益によつて支配されるようになるのです。多數を集め得たこう云ふ會は身體計り大きくて精神がなく、其のために動きがとれなくなると云ふようなかたちになります。

或ひは、又、他の見地からは多數は暴政になると云ふ恐れがあります。暴政でも困るし、そうかと云つて、不活動的な大い計りの集團でも困るので、いづれにしろ、單なる多數制は好ましいものではありません。それでは、少數の權利を主張するのかと問はれるなら、否、と答へなければなりません。なぜなら、少數の意見だからと云つて、それが完全であると云ふわけはありません。少數は必ず有德だと定まつては居りません。十人のうち四人の方が必ず正當だと信じる理由はありません。多數が正しいとする假設論が間違つてゐると同じてうに、少數を正しいとする假設論も間違つてゐるのです。正しいと云ふことは少數、又は、多數とは別なものであるのです。

少數制贊成者は申します『人類が、今、其の恩澤を蒙つて居る過去の大革命は、皆少數の頭から始まつたものである。少數が、結局、多數に勝つた例はいくらもある。』と。けれども、少數が多數に勝つたように見ゆるのは表面だけであつて、實は、頭數こそ少なくても、其の時の問題を考へて居た人は多數の中によりも少數の中に却つて多かつたのです。ですから、私共は頭數ではなくどれだけの人がどの位ひに迄其の時の問題に力を入れて居るかを見ることが必要です。

此の意味を說明するために一つの例があります

一人の婦人がありました。彼女は教育らしい教育はなかつたのですが、併し、聰明な頭腦を持つてゐました。彼女は自身の一家を扶養するために洗濯を職業としてゐやしよけれども、母の會が開かれる度毎に必ず出席しました。そして、實際上の經驗から淺薄な學問を振り廻す人々を片つぱしから說得してしまいました。其のために其處に集まつた人々は家庭のこと子供のこと、衛生、家政、其の外每日の生活に關する多くの問題を論議し、いつも高尙な標準を得て歸へると云ふことでありました。時とすると或る事柄に關して投票が行はれますが、併し、其の投票をする前に、既でに、全會員は實驗上の上に立つた權威ある洗濯婦人の意見に感化されて全部融和して其處に一つの集合意志が出來上がつてゐたと云ふことであります。つまり、頭數では、たつた、一人の婦人ですが、併し、其の婦人が實際問題に關して握つてゐた眞理は全會員がそれに對して持つてゐた考へと合して猶大きなものとなつて其處に一つの集合意志が出來上がつたのです。

其處で、私共の希望するものは多數でもなく少數制でもなく、多數と少數で融合して其處に出來上がつた共通意志です。それによつて、ことを處して行きたいのですですから、此の共通意志は如何にして成立されるものかと云ふことを私共が學んだ時に、其の時に私共は完全な民主々義に達することが出來るのです。人々が民主々義々々々々と口でいつて居るのでなく、彼等自身が民主々義の材料になり得た時に民主々義は始めて實現するのであります。

婦人はこれから婦人自身の位置を改良するために計りでも大に團體の力を利用しなければなりませんが、既成の男子の團體の多くが單なる多數を以て足れりとして居るような處を模倣することなく、眞の意味の團體、則ち、鞏固な集合意志を生みだすような團體を造りたいへ思ひます。

時事批判

最後は唯一つ

レエニンが曾つてデーリーヘラルドの主筆ランスベリイに對して「君及勞働者達は戰ひたくはないだらう、だが資本階級は戰ひをいどむであらう――」と云ふて勞働者達がその好まない戰ひをしなければならない止を得ぬ理を説明したさうである、これは確かであると思ふ、現代の社會といふものを見ると勞働階級が戰を起したのではなく、何時も資本家の方でその戰の原因を作つてゐるといふ事に氣がつく筈である。德川時代の旗下に對する町奴一派の反抗でも――例へ彼等が單に權力に盾をつくと云ふ考へ許しであつたとしても――彼等を起たせたのは旗下八萬騎が挑戰したものと

見ていゝのである、私は彼のロシヤに於けるボリシエーヴィキの行き方を正しいとは少しも思はない寧ろその行動が餘りに血生臭いのに戰慄する、けれどもボリシエーヴィキ（多數派）として立つに到つた程ロシヤの政治の行き方に大誤謬のあつたことは嚴正な批評の上に立つたら爭はれぬことであらう。即ち私のこゝに云はうとすることは、一つの運動として現はれてきたものよりも、その運動をしなければ生きて行けない程社會を權力化したその蒙を考へてもらひたいと云ふのである。

　近來頻りに起きた團體的婦人運動若しくは個人として自己の信念によつて社會生活を營まうとするものに對していろ〳〵な批評がある、そしてその批評は何時でも的を外れた觀がある。なかには

相當頭のある人から馬鹿氣きつたことを聞かされることがよくある、云ふまでもなく婦人運動は既成の社會組織に立してある一部もしくはその根底に新意味を盛らうとする革命の聲と實行であることは云ふ迄もない。

赤爛會が「私達の兄弟姉妹を、窮乏と無智と隷屬とに沈倫せしめたる一切の壓制に對して斷乎として宣戰を布告するものであります」の綱領をもつて起つたのは喜ぶべきことである、だが破壞的行動若しくは、反抗的行動が、その改造の本旨に適ふものであるかは、勿論その主張によつて會の性質によつて止むを得ないことではあるが考ふべきことゝ思ふ、社會の改造は勞働問題を外にしてないといふ聲はその本旨に於て事實である、山川菊榮氏が「人間が自己に屬する何ものかを賣つて生活せねばならぬのは人間の自然に反した不合理の極度である、美貌であれ、勞働であれ、人間が自己に屬する何ものをも賣らずに生活し得る社會を能ふ限り近き將來に於て實現しなければならない――」といふ唯物的經濟觀からの出發は現代社會を見るときに確かに表現された事實を捕らへたものである、從つてかうした見方に出發する急進的な人達は温和主義的な運動をあきたらず思ふであらうが仕方がない、山川氏が赤爛會の頭目として其の學究者として頭腦の明晰なる現代女性の第一人者として……起つ赤爛會に幸あれかしと祈るものである、だがもし自分達の運動のみが眞の行き方であると思つたら餘りにそれこそ階級的な誤まつた見方であることで階級打破をくわだてゝ反つて、自己の行動の上に階級を造るディレンマに落ち入つてゐる事に氣づかれたらいゝと思ふ、山川氏は聞くところによれば、新婦人協會に對しての批評を書くさうであるが、それを見た上で協會の蒙は正し、又立場の相違は充分に答へもしたいと思ふ。(伊都)

蒙を啓く

杉田直樹といふ醫學博士が東方時論で「賣笑婦は文化の一產物だ」といふ愚論をしてゐる、一體文化とはどんなことだと此の博士は思うてゐるの

だらうか、たつた人間一個の肉體をさへ、もてあましてゐる人の文化觀を聞いて見たいと思ふ、こんな事がある「賣笑婦を一既に之れを有害な亡國的厄介物として排斥するのは輕卒不眞目な態度なるを免れぬ。社會改革上寧ろ之を善導し純化し其の特有の美點を助長せしめ社會的存在者として充分價値あるものとしなければならない」と、私は一寸質問してみたい、これは此の博士ばかりでなく多數のこんな考への人があるやうだ、辻潤氏も「自由藝妓の必要の急を提唱す」と題して内容貧弱な愚論をしてゐる、辻氏は「參政權の獲得に熱狂するよりも社會的事業として又遙かに優れた直接運動である」と自由藝妓の必要を書いてゐる。

一體賣笑婦はそれ自身その出現は社會制度の缺陷から發生した悲劇である、これを統計上から見ても自明である許りでなく賣笑婦自身の立場を考へて見たらどこに特有の美點があるのか、どこに社會的存在の價値があるのか、社會を毒するとか毒しないとかは問題でない、賣笑婦それ自身の問題であるのだ、そしてそれは大きは社會問題を生んでゐるではないか、杉田博士はそしてなほ「我邦では藝者といふ者があつて……一部の男子に少なからぬ慰籍を與へてゐるのは寧ろ誇りとして可い」と、これは果たして本當の言葉であらうか、たゞ所謂遊蕩男子に少からぬ慰籍を與へてゐるのも事實に相違がない、けれども大多數の人間がその一部の遊蕩男子の存在のために、どれ程血の汗を流してゐるかを考へたらいゝ。ことにまた家庭悲劇も多くの場合さうした資本家的男性の態度によつて生れてゐるのも事實ではないか。

今の藝者とは自由公娼である、唯公娼は僅かの金で得、藝者は相當な馴染と相當な金を要すると云ふだけのことである、今これを花柳界發展の上から證明して見ると、新柳、二橋をはじめ市內廿三ヶ所の藝者屋が明治三十九年千五百軒、藝者が三千二百人、大正六年には二千五百軒に六千五百人、大正九年、三千軒に、八千人の多數を示し、私娼窟は明治卅九年全市百十軒、大正六年に千三百軒九年、千八百軒といふ數である。京都帝國大學皮膚科來患者に就て青島氏の調査によると次の

やうであると云ふことである。

花柳病毒者三百十八人｛男　二七一人
　　　　　　　　　　｛女　三　九人

内	黴毒	一四三
	淋病	一二九
	軟性下疳	三　九

その傳染經路

公娼より	一六三
藝者より	三六
酌婦より	二七
密賣婦より	四
玉突矢場の女より	三四
其の他	二六

こんな調査や統計の筆をかりたら切りのないことであるがこれは藝妓といはず公娼といはず事實に於ては同じ行爲のもとにある娼妓である、これら表面的な事實にも杉田博士の云はるゝ通り我國の誇りなのかとあきれざるを得ない、私は勿論藝妓とか娼妓の生れた止むを得ざる事情を知るに難くはない、從つて非常な同情をもつてゐる、けれども是れは決して杉田博士の云ふ誇りでも何でもない。

婦人運動は現制度の缺陷を救はうとする願ひと行動である。それで女子に不利益な……といふことは社會全般に不利益なことだ――制度の改正の爲に女子參政權を獲んとすることに何んの不思議があらうか（私はどこまでも社會制度を見た眞から發足してゐるのでなく、人間本然の即ち本質的意志から出發してゐるといふことをつけ加へておきたい）。

杉田博士が「女子は果たして解放に堪ふるか」といふ題で女性と男性との生物學的比較研究をしてその結論だけを書いてゐられるが、私もその事實には異議がないけれどもさうであればこそ、即ち女性が男性に生理的に劣つて居ればこそ婦人の運動が必要なので、劣つてゐるが故にこのまゝで居れ、といひ、一方では社會の改善も此の劣つてゐる女性が邪魔するが故に生活改善の實が上らないと云ふのは少しどうかしてゐると思ふ、私は生活改善は寧ろ男子が權力的に出て眞の理解がなく、

「何が女に」と思ふその意志、若しくは潜在意識が――即ち權力文明意志とでも云はうか――改善の邪魔をしてゐると見るものである。生物進化學の上から見ても、劣つてゐるから、とこれを葬つたら、何時優性になり得るのか、劣つてゐればこそ運動も起りそして社會種族の永久性を確かにしやうとするのではあるまいか。

一角より見えない科學者の偏狹な獨斷は、それをそのまゝ理解なしに私達女性の立場に批難を加へやうとするは餘りに潜越といふより井の蛙の感がある。

女性が現在の社會制度に對して不滿をもつて起つてゐることは、かうまで當然せしめた男性の獨裁權が誤まつてゐたことに氣がついてくれたらいゝと思ふ。さう考へたら愚論的批評は下し得ない筈だから。（伊都）

綱紀振肅

シーメンス事件以來暫くその聲を聞かなかつた綱紀振肅問題が、滿鐵事件、亞片事件及び東京府の疑獄、或は最近の印紙横領事件等を其導火線としてまた現れるに至つた。これを政治的に見れば政界に於ける必然の循環運動であつて別に驚く程の問題でありませんが、これを議會政治否認の聲の姦しい現代の社會を背景にして見る時、多少の興味を覺えずにはをられません。と云ふことは現在の政治にそれがどれだけの力を持つてゐるかと云ふ事よりも、現在の民衆がどれだけその問題に興味をもつかといふ點です。

新聞紙に依つて傳へられた、在野の政客や學者實業家等の聯合に依つて組織された綱紀肅正大會の宣言書や、所謂名士の演説なるものを見ても、それは全て現在の政治組織及び社會組織をそのまゝ承認した、一種の現政府彈劾案に過ぎないものであつて、それらの弊害を齎した現在の政治及び社會組織に對する批判は少しも現れてをりませんさうした運動に依つて、果してシーメンス事件當時に於ける日比谷の燒打の時のやうに、民衆の血を湧かす事が出來るかどうか、それは疑問です。無論現内閣はそれに依つて、其の互解の時期を一

層早められるかも知れません。然しそれは過去の政治史上での一個の循環運動に過ぎないものであつて、社會的に目覺めた現代の民衆にどれ程の交渉があるかと云ふ事にも、等しく疑問を抱かずには居られません。

現在に於ては、内閣の彈劾、更に進んでは既政黨の打破、と云ふやうなことは、民衆の心を湧き立たせるべく餘りに聞き古された題目です。少く共現在に於ては、思考し得る凡ゆる人々にとつて問題は議會制度の否定肯定、現在の社會組織の否定肯定と云ふ事にかゝつてをります。さうした思想的背景を無視した綱紀振肅の運動は政界の一のお祭運動と見るより外ありません。只その運動が民衆に如何に取扱はれるかと云ふ事によつて、更に普遍的に否定か肯定かの問題を一般の政治意識或ひは社會意識の上に明確に刻むであらうと思ひます。現在のやうに社會運動の旺盛な時代にあつては、イギリスの現内閣、アメリカの現内閣、のやうに比較的政治道德の保たれてゐるといふ事は現在の組織をそのまゝに承認しやうとする人々にとつては一つの強味であると同時に、日本の現在に於けるやうな政治的狀態は、所謂危險思想家にとつては、寧ろ一つの強味であらねばなりませんさういふ意味で、危險思想の撲滅を圖つた原内閣は、反つて危險思想の宣傳を促したといふ皮肉な現象を出現させるに至りました。そして政治に失望した多くの民衆は、それ等の危險思想に新しい政治、新しい社會に對する希望を見出すことを餘儀なくされるに至りました。民衆はそれ等の危險思想の中から自分等の進むべき道を發見しなければならなくなつたのです。然し乍ら單なる破壞運動――破壞の爲めの破壞運動は、破壞される舊組織そのものに對してのみならず、破壞する民衆にとつても決して喜ばしき現象ではありません。殊に日本のやうな島國的國家に於ては、ヨーロッパ大陸に於てのやうに革命を豫想する事は、少く共現在ではきつと不可能であると考へられます。現在に於ては、民象に降りかゝつた最も重大な問題はそれであつて、如何に舊組織を破壞し、同時に如何に新社會を建設するかと云ふ事にあるのです。

所謂危險思想と呼ばれてゐるアナーキズム、サンヂカリズム、マルキシズムなどは、未來の社會生活に對してはそれぞれ有力な暗示であるとは思ひますが、それ等をそのまゝ實現しやうとする事は恐るべき事であります。只それ等のものが人間の現實の社會生活に面接する事によつて、その意義が生じます。全ての社會の進歩は、保守と進歩のあざなへる繩によつて進められて來たものであります。從つて單なる政治運動として現れた綱紀振肅の運動の如きは、未來の社會に對して、それ自らとしては何の暗示をも與へないものでありますが、來るべき新運動に對して一個のピエロとしてまた興味のある問題であると思ひます。

（むめお）

特殊部落婦人の覺醒を望む

數日前、或る婦人雜誌の新聞廣告に

「新平民と知れて離婚になつた私」

といふ記事の見出しが載つてゐるのを見て、二人の子供まで出來た仲を悲しい離別沙汰になつたといふその氣の毒な人妻の身の上に就いて、私はつい引入れられる樣に種々な臆測を爲すことを禁じ得られなかつた。

是れと同時に私は又一つの事を思ひ出した。それは曾つて、女性同盟編輯から

「婦人が參政權を獲得したら貴下はその權利を行使して何を爲さんと願はるゝか」

といふ意味の質議に應へた中に

「華士族、平民、庶子、私生子等の稱を廢すること」

といふ一頁を擧げておいた事であつた。何故ならば、私がこの一頁を擧げた最大なる動機は、私等女性として看過するに忍びない悲慘な境遇にある現在の所謂新平民の一團に對する衷心からの同情であつたからである。

國法の上にはもう新平民などゝいふ稱が用ゐられてゐないにもかゝはらず、實世間ではなほこの陋習を脱し得ないで、社交上截然たる區劃を作り氷炭恰も相容れぬといふが如き有樣がある、現に東京府下近郷にも所謂特殊部落と名づくる村落が

可なりにあつて、他部落から殆と孤立して一種低級な生活狀態を持續し、世を呪ひ、人を怨み、身をはかなんでゐる可憐な同胞が澤山にゐることを思ふと、大東京に住んでゐる私等が目と鼻の間にゐて夫れ等の人々とは全然沒交涉に、見て見ぬ振りをして過すといふことは道義的良心に照らして或る不作意的罪惡意識を呼びおこし深く自責せずには居られない。

　國史上の暗國時代たる戰國爭奪の世はいろ〳〵な社會的悲劇を現代にまで殘存せしめてゐる。極端な男尊女卑の習俗はもとより、嚴格な階級思想及び是れに伴ふ、弱者絕對服從の奴隷道德など擧げて數ふるに遑がない。そしてこれらの舊慣陋習は、今や單に舊時代の考古的遺物として、史家のライブラリー、を飾る所の錯答たる化石であつて論理上新時代の生活にとつて何等の權威にも値せぬものである。屍山血河の痛ましい爭鬪の餘弊ををさめるに急であつた武人の階級が、自己を本位とした、無知なる社會政策を樹立して、今考へて見ると寧ろ滑稽に思はれる職業的分類によつての階級價値を差等づけた爲めに、上古天皇が庶民を大御寶として比しく愛しませ給ふた我が神ながらなる美風を傷けたことは尠少でなかつた。維新の風雲一過、新日本の建設以來星霜五十有餘を閲しての今日、なほこれら舊慣陋習の餘弊に苦しむものゝおほいといふことは、心あるものゝ誰しもが悲しまねばならぬ事實である。

　歐洲戰亂の震駭によつて全世界を蔽うた思想的氾濫は、今や我が國にも襲ひ來つて、澎湃上下の民心を洗はんとしてゐる。乃ち國民はこの機に於て再び大悟大慚愧して一切の價値なき舊慣陋習を破棄し、人類正義に基づく徹底的維新を成就し、天翔ります明治大帝の英靈を安じ奉ることを力めねばならぬ。國と國とが弩級艦、重砲、飛行機、潜水艇により物質と化學の力によつて戰ふべき時代はとくに過ぎ去つた。これからは愛と正義と自由とに目醒めたる國民の心靈的活動の能不能のあらはれは、直ちに國家そのものゝ優劣の價値を規定し、この意味に於て劣弱者の地位に墮ちた國家は生存競爭の敗殘者として坤圓球上その姿を消さ

ねばならぬ破目に陥つてしまふであらう。

人種平等案を提げて、外世界列强に文化的爭ひを挑んでゐる日本國民の大多數が内に於て區々たる職業的差別から來た因襲的偏見を固持して罪もない小數同胞を威壓して果して恥ぢるところなきを得るであらうか。

私はこの事に對して當局が今少しく活潑なる活動を試み一日も早く國民大多數の固陋な偏見を打破することにつとめられんことを切望するは勿論であるが、亦多數のいはれなき壓迫に甘んじ、自らの正義を主張することもせず、依々として其の舊套を脱することが出來ぬ彼等所謂特殊者男女の無知と卑屈とを責めないではゐられない。人の自らを卑しむはその自ら卑しむよりすることのおほいものである。現在の彼等の立場といへども若し與へられたる機會と忠實にとらへることを怠らないで今少しく自己の人格的價値を自覺して社會的に活動したならば、今日の餘弊の如きは最早とくに跡を止めなかつたかもしれない。

前述の離婚問題にしてもその夫たる男子側の無自覺が原因をなしてゐることは論を俟たぬが、妻自身に今少しく徹底した信念があつたならと尠からず殘念に思はれる。一般女性の自覺を要すること急なる今日なほ彼の特殊境遇にある婦人達の自覺發奮を私は切に〱希望してやらぬものである

（美都）

最近數年の離婚訴訟は驚くべき增加で司法省の統計に依れば全國で、大正四年八百十三件、同五年九百五十一件、同七年千百四十二件、同八年千二百十八件の激增で其内一番多いのは夫の虐待に原因するもの、次は夫が行方不明となつて生活に困るもの、第三は夫が犯罪を犯して入獄した爲め自己の名譽から遂に離婚を訴ふるもので要するに妻から夫に對する離婚の訴へが大多數だといふ。中にも文化の程度の一番發達してゐる東京は全國中で最も多く總數の約一割を占め、大正四年七十六件、同五年百一件、同六年九十五件、同七年九十八件、同八年百十六件、同九年百五件といふ增加であるさうな。

婚姻の性盾と貞操蹂躪問題

布施辰治

一、性的生活と婚姻

徹底的に考察せらるゝ性的生活と云ふ事には、廣狹二樣の解釋があります。

長谷川如是閑さんの説に由ると、私共の一言一行一擧一動は、何一つ廣い意味の性的生活に非ざるものなし、と云ふ事であります、けれども、私の今こゝに御話ししようとする婚姻の性質に關する解説は、左樣した廣い意味の性的生活に對する徹底的の考察ではなくて、更めての説明を加ふる迄もない、狹い意味の男女間に於ける、性的生活を主題とするのでありますが、左樣した狹い意味の性的生活は、今後果してどのやうに進化して行くであらうかを靜かに考へて見ると、漸次世の中の事が何んでも複雜に爲つて行く、男性女性を通した參政關係の共助か――職業關係の爭奪かと云ふ問題に關聯して、隨分面倒な性的生活の複雜さを増して來るに違ひないと思ひますが、私は今しばらく左樣した性的生活に關する徹底的な考察を省略して、今日の法律上、私共に許されて居る唯一の性的生活である、と同時に、私共多くのものゝ理想として居る一男一女の靈と肉とを永久的に結合する婚姻――法律上では結婚と云はずに婚姻と云ひます――と云ふ制度を大體に於て認めた見地から、法律上に於ける婚姻の性質を解說して、婚姻の性質に關する法律上の智識を有つて居らない爲に、數次法廷を煩はす處の所謂貞操蹂躪問題に就て、慰籍料の取れる場合と、取れない場合の起つた判例を擧げて論じて見たいと思ひます。

二、法律上に於ける婚姻の性盾

性的生活の目的から觀た、所謂婚姻は、夫婦關

係の和合に由りて、人生の幸福を創造する事であります、そして所謂結婚の意義は、一男一女の靈と肉とを永久的に結合する性的生活であつて、別に六ケしい問題が蹤つて居さうにも思ひません、處が、法律上から觀た婚姻の性質に就ては、種々の異説があります、何故なら、所謂婚姻の目的は私共の性的生活を合理化するにあるのでありますが、左樣した性的生活の理化合を決定する、所謂婚姻の意義は「一男一女の靈と肉とを永久的に結合する男女の合意なり」と見るのが第一説で、第二説は性的生活の合理化を一男一女から要求する意思表――即ち届出で――を法律が承認する事であると云ふのであります。

次ぎは、一男一女の靈と肉とを永久的に結合した、共同生活の事實を法律が承認する事であると云ふ第三説であつて、お互に一長一短の理由を提げた、長い間の論爭を戰はして居るのであります一寸考へると、斯うした學説上の論爭などは、どちらの成敗に決しようと、私共實際の性的生活に對して、何等の交渉をも有たないもの丶如くに思はれますが、實は私の之れから擧げて見ようと思ふ判例に由ると、所謂貞操蹂躙問題に就て、慰藉料の取れる取れないと云ふ大變な利害關係を有つ事に爲るのであります。

三、性的生活の合理化と婚姻

性的生活の合理化を一男一女から要求する意思表示――即ち届出で――を法律が承認する事であると云ふ意義に婚姻の性質を解説すれば、未だ法律に由りて、性的生活の合理化を承認せられない一男一女の結合は、如何に永久的なる靈と肉との相信相愛であつても、夫れは不合理の性的生活だと云ふ事に爲つて仕舞ふのであります。

けれども、左樣した解説に由る性的生活の合理化を、一男一女から要求する意思表示――即ち届出――は、民法第七百七十五條に「婚姻ハ之ヲ戸籍吏ニ届出ツルニ由リテ其ノ效力ヲ生ズ」の届出に當るのでありますから、左樣した届前に、一男一女の間に靈と肉とを永久的に結合せしむる相信相愛の實行がある筈だと云ふ事は、容易に想像せらる丶事實であります。

從つて、前に擧げた第一說に由る婚姻と云ふ事實、即ち一男一女の靈と肉とを永久的に結合する合意が、今解說して居る第二說の婚姻の前提ともなれば內容とも爲るのでありますが、第二說の所謂屆出に由る法律上の承認を經る迄は、如何に一男一女の靈と肉とを永久的に結合せしむる相信相愛の合意があつても左樣した相信相愛の實行たる性的生活が許されない事になります、モット判かり易く語を換へて言へば、法律上の屆出に由る承認を經ない性的生活は、一切法の認めない處だと云ふ事に爲つて仕舞ふのであります、そして法の認めない性的生活に由りて、或る者の受けた損害と、或者の得た利益とは、損害を受けたものゝ災難で、利益を得た者の僥倖だつたと云ふ事になるのでありますから、其處に、所謂法律の問題が起りません、又起さうとしても起し得ません、けれども夫れはあまりに事實を無視した法律の專橫に過ぎて居りますので、性的生活に關する或者の不幸と損害とを救濟する爲に、或者の不當と利益とを膺徵したり、賠償せしめたりする、實際に適合しない形式一點張りの屆出主義を採る婚姻の性質觀は、到底私共の贊同し得ざる所であります。

處が、我國現行民法に於ける婚姻の性質觀は、さうした第二說に傾いて居るのであります。前きに援用した民法第七百四十五條の規定と云ひ、婚姻の豫約を許さない一部學者の主張と云ひ、大審院の判例と云ひ、婚姻の屆出のない限り——言ひ換へれば、一男一女の靈と肉とを永久的に結合する性的生活の合理化を要求する意志表示を法が承認しない限り、合理的の性的生活は、絕對的に許されないのであります。從つて、かうした見解を頑强に維持せる數年前までの判例は、所謂貞操蹂躪問題に就て、何等の保護をも與へて居らなかつたのであります。

四、貞操蹂躪を保護しない判例

刑事上から觀た、無理な手込めの强姦だとかウソ八百の口車に乘せた、奪取誘拐に基く貞操蹂躪でもない限り、一男一女の合意に成る性的生活は法の保護せざる無責任行爲として、事實上の實力問題に任せた或者の不幸と或者の僥倖とを決せし

めて居つたのであります。斯うした婚姻の解釋に由つた時代の判例を二三擧げて見ますと、

一、我民法第七百七十五條に於て、婚姻の成立に關し煩瑣なる形式を要求せざりしは、及ぶ限り當事者をして他の事情を煩はされず、其自由なる意思を以て婚姻を遂げしめんとするの法意にして、之を推し考ふるときは、將來婚姻を爲すべしとの豫約の如きは、法律の認めざるものなることを明にし得べきなり、蓋し豫め約して互に婚姻を爲すべきの義務を負ふ契約を法律に於て認むとせば、必ずや何等かの手段により之より生ずる義務を直接間接に强制するを要し、之が結果として義務履行の際當事者の一方が種々の事情により其の意思を飜すことにするに拘らず、該契約に羈束せられ、義務不履行にする法律上の責任を顧慮するの餘り愛情に基かざる無意義の婚姻を爲すに至らしめ、大なる不幸を其當事者及其家族に齎すの結果を見ること少しとせず、延いて法の保護する一家の安寧を害するの虞れあるを以てなり。

一、我が民法上婚姻の屆出を以て、婚姻の成立條件と爲す結果、其屆出無き限り、如何なる場合に於ても、法律上絕對に婚姻の成立を否定すべきものとす、從て緒約を授受し婚禮の日を定めたる事實は之を以て婚姻の成立なりと認むるを得ずして、將來に於て婚姻を爲すべきことを約したる當事者の合意に過ぎずと認めざるべからず、畢竟當事者は、單に男女の同棲を約したるものに非ずして他日戸籍吏への屆出を了し、夫婦關係を成立せしむべき目的の下に、此の合意を爲したるものと認むるを妥當なりとす、而して形の如く將來に於て婚姻を爲さんとする契約は、必然的に婚姻に關する當事者の意思を束縛し、婚姻成立の當時存する事を要する當事者の自由意思を制限する不當の結果を伴ふべきが爲め、公の秩序に反する事項を目的とする法律行爲として、法律上無效なりと謂はざるべからず。

と云ふ事に爲つて居りますが、其の根本に遡つて

判例の理由を探ねて見ると、矢張り婚姻の性質を第一説の所謂自由意思尊重形式的に解説する第二説に係らしめた結果だと云ふ事が判かります。

五、婚姻の實體と風俗習慣

此の問題を詳しく論ずると、隨分面倒な議論があります。英國の諺に、法 は男を女にする事が出來ないと云ふ事がありますが、全く法律は男を女にする事は勿論、有を無とし、無を有として私共の現に活きつゝある事實に打ち勝つ事は出來ません、從つて、私共の間に積み成された風俗習慣等を無視する事が出來ません、實を云へば、總ての人の純理若くは利益なりとする風俗習慣に從ふ私共の生活を承認するのが法律なのであります。

於玆乎、我國現在の所謂婚姻に關する實際の風俗習慣は、果してどう爲つて居るかと云ふのに、處に由り、人に由りての相違もありますが、兎も角も、法の認めた合理化の性的生活でないものは一切之を無視するなどゝ云ふ事はありません、其處に尤も正しい婚姻の意義は、一男一女の靈と肉とを永久的に結合する性的生活の事實を承認するものなりと云ふ、第三説が活きて來るのであります、が、しかし、第三説に所謂一男一女の靈と肉とを永久的に結合する性的生活の事實が、時の風俗習慣に從はないものであつたら、性的生活の合理化を要求する法の承認を受くべき婚姻の內容とはなり得ないのであります、けれども、時の風俗習慣に從ひたる性的生活の事實は、素より當然の保護を受けなければならないのであります、こゝに婚姻の性質如何に關する解釋の進步があつて、所謂婚姻の豫約も亦、之を認むる事に爲つたのであります。斯くして一男一女の結合した事實上の性的生活に於ける、或者の不當を一方に制裁して或者の不幸を一方に救濟する事が出來るのであります。

六、貞操蹂躪を保護する判例

斯うした婚姻の性質に關する解釋の進化は、近來の判例上、どのやうに爲つて居るかと云ふと、

一、婚姻の豫約と不法行爲——婚姻の豫約は異性間に於て、將來適式の婚姻を爲すことを目的とする契約にして、之れに基きて婚姻の儀式

を擧げ、事實上早く已に夫婦の生活を爲す者少しとせず、而して世人も之を認めて眞實の夫婦の如く思惟するは、我邦從來の慣習なるを以て、我國法中此豫約に付きて何等の規定を存せず、又此豫約に基きて婚姻を強要するを得ざるが故に之を無效なりとするを得ず、寧ろ親族法上に於ける一種の法律行爲を以て之を目するを至當とすべく、從つて此の豫約を爲したる男女間には、一種の法律關係相生じ互に信義を守りて、相當の時期に正式の婚姻を成立せしむることを勉むべく、故なく之が成立を妨げたるときは違約の責を免れざるは勿論、時に或は不法行爲たることあるべく故に第三者に於ても、亦須く兩者の關係を敬重し、敢て之を冒瀆するを得ず、若し故意を以て之を冒瀆するときは、即ち是れ他人の權利を侵害したるものにして、同じく不法行爲の責を免れざるものとす。

一、婚姻豫約違反と慰籍料——婚姻の豫約せられたる女子が、中流農家の女子にして、社會上相當の聲譽を有し、且つ其間に女子を分娩したるときは、違約者は之を慰籍する爲め金五百圓を支拂ふべきものとす。

一、婚姻豫約と相手方の不當要求——婚姻は男女間に於ける特別の信義を要素と爲すべきものなれば、一旦其豫約が成立したる後と雖も、夫たるべき者が妻たるべき者に對し、不當に金錢其他の要求を爲し、其要求に應ずるに非ざれば同棲を許さゞるが如き場合に於ては、妻たるべき者に於て、其豫約を履行し能はざるは當然なれば、之を以て不當に其豫約を履行せざるものと謂ふことを得ず。

一、婚姻豫約の違背と損害賠償——男女が既に婚姻の豫約を結びて婚姻の式を擧げ、同棲し來りたる以上、何等正當の事由なくして違背するを許さず、若し正當の事由なくして違背するときは、相手方特に婦たる者は之が爲に終生の不幸を招き、其の受くべき苦痛の甚大なるを以て、不履行の責ある一方に對し其の損害を賠償せざるべからず。

の改善を示して居ります、斯うした判例の内容に就ても亦、一々説明を加へれば、隨分非常識と思へるものもあれば、又如何にも不徹底なと思はるゝものもありますが、私は今其處迄は論及しません。

七、理屈と事實と法律

要するに、所謂婚姻の性質をどう解釋するかゞ多くの女性を悩ましめて居る貞操蹂躙問題に就て慰籍料の取れる場合と、取れない場合との區別を生じて來ると云ふ事が分かつて貰へる丈けに止めて置きます。

私は形式一點張り法律一點張りで、事實上の性的生活を無視した從來の判例や第一説は甚だ間違つて居ると思ひますが、第二説も亦甚だしく誤つて居ります。然るに第三説は正に事實を事實として、之を認むると同時に、さうした事實の保護を法律の承認に俟つた點に於て極めて至當であります

私は、此のお話を終るに望んで、婚姻の性質は第一説に所謂一男一女の靈と肉との永久的に結合する男女の合意に由る、夫婦關係の和合から、人生の幸福を創造せんとするものでなければならない點に於て、當事者の自由意思を尊重します、即ち婚姻は相信相愛の一歩に發足しなければならない事を御勸めします、けれども、さうした、相信相愛の一歩に發足する相信相愛の實行であつても時の風俗習慣に準じに性的生活でなければ、法律上當然の保護を受けられないと云ふ事を御注意迄に申上げます。

從つて、時の風俗習慣に準じて、一男一女の靈と肉とを永久的に結合する自由合意に發足した性的生活でさへあれば未だ法律上の承認――即ち屆出で――が無くとも、之れに裏切つた一方の不當を制裁して、一方の不幸を救濟する裁判上の保護があります、けれども夫れは固より臨機の救濟で未だ刑事上の保護がありません、相信相愛の性的生活に裏切るものに對して、民刑兩樣の制裁を要求する丈けの保護を得るには、第三説に從ふ性的生活の事實に對する法律の承認を求めて、所謂婚姻の性質に從ふ全條件の完備する事が必要であります。茲に性的生活の保護は離婚問題其他の關係に於て、窮屈過ぎるほど保護があるのであります。

來るべき時代の女姓

アフグスト・ベエベル

來るべき社會の女性は、全く獨立である。よしんば、男性の優越とか、或は又利用とかいふものがあるとしても、もうそのために、彼等に服從させられる樣なことはない。その場合には、女性は男性と等しく、全く自由な人間である。

敎育に於ても、性の相違から、これと違つて、どうしても避け難い、特殊の取扱ひを受ける樣な場合の外は、女性は男性と全く同等である。卽ち彼等は、生存の自然的狀態にあつて、その精神的並びに肉體的の力と、能力とを、充分に發達せしめ、又待彼等は、自分の欲求や、趣味、才能などの、命ずるがまゝの活動の世界を、選擇することもできるのである。彼等は、男子と全く同じ條件で働く。すなはち彼等は先づ產業上の或種の社會的の勞働に從事する。そして次には又、敎育家ともなり、先生ともなり、或は嫉姆ともなり、後には又藝術とか或は、科學に沒頭し、そして又、行政上の或種の職務にも及ぶのである。彼等は全く彼等の意のまゝに、又機會の與へるまゝに、同性或は異性と共に、娛樂や慰安を得るのである。

戀愛の選擇についても、彼等はやはり、男子の樣に自由である。戀し又戀される。そして、彼等自身の自由意志より他には、何物にも、束縛される樣なことはない。二人の戀人同志の婚約は、原始時代のそれのやうに、相互的のものであつて、何等公の干涉を許さない。併しそれかといつて原始時代のそれと、全然同じだといふのではない。何故なれば、彼等はもう、ちやうど彼等を贈物や商品の樣に容易く得、そして又自分の思ふまゝに捨てゝしまふ樣なことができたところの、男性の

奴隷ではないからである。
人類はその最も強い衝動に關しても、他の自然の本能の場合と同じく、全く自由に行動することができる樣な狀態に居なければいけない。性的衝動の滿足は、他のすべての自然の本能の滿足と同じ樣に、個々の人々にとつては、全く私事である。誰も自分達のことを、話す必要もなければ、又どの第三者も、干渉する權利を、いさゝかも持つては居ない。彼等はその知識と、敎養と、そして獨立とによつて、容易に正しい途を選ぶことができるであらう。そして若しも、不和とか、失望とか或は又嫌惡とかいふ樣なものが起つた場合には、さうした不自然は、したがつて又不道德でもあるお互の關係は、道德がそれを破棄する樣に要求するであらう。

男子と女子とが其の數に於て、畧同じくなり、そして又これまで大部分の婦人に、獨身又は淫賣を餘儀なくせしめてゐたところの、他のすべての原因が、消滅してしまふ樣になるならば、男子はもはや、何等の優越をも、主張することが出來る地位には居れなくなるであらう。又一方に於て、社會の狀態は、前にいつた樣に、今日の結婚生活に影響して、しばしばその完全な進歩をはばんだところの、多くの不都合とか、或は又、煩らはしい要素とかいふものを、除去するであらう。

これらの障碍とか、或は又婦人の現在の狀態に於ける天性に對するこれらの矛盾とかは、我々の現在の社會狀態の極端な變更を、受け入れさうにもないやうな人をすら、何等外部の妨げなしに、全く自由に戀愛を選擇することが正しいことであるといふことを認めさせ、又事情によつては、お互が自由に離婚することが、正しいことであるといふことを、承認させるに至つた。例へば、リチヤード・ストロンベルヒが女流作家ファンネー・レヲルドの婦人權利論に對する論爭の中で、次のやうなことをいつてゐるのである。

「あなたが若し、社會生活とか或は又政治生活に於て、兩性の全く平等な權利を、主張なさるものなら、ヂョーヂ・サンドが解放運動のために、奮鬪したことは、矢つ張り正しいことであるといは

なければなりません。あの努力によつて、サンドは、男子がながいあひだ異議もなく占有してゐたところのものを要求したのでした。婦人の單なる、感情ではなくして、その智識を平等にし、そして男性の思ふがまゝに彼女をまかせないやうにすることは當然のことでした。これに反して、もし婦人が生れつき、權利と、それに必然的に伴ふところの義務卽ち異性の智的巨人との競爭に於て、彼女の頭腦を極力働かすといふ義務を持つて居りますならば、女性は同樣に、それが善いと思ふ事はどんな方法によつてでも、一生懸命に、自分の權利を確保するために、同じ權利を持たなければならないのであります。たとへば私達は皆、何の道德的の憤りを感ずることなく――最も偉大な人間の例をとれば――ゲーテが、どんなに度々次から次へと、婦人のために、その心の熱と、魂の誠とをつひやしたかを知るのであります。すべての思慮ある人々は、これを全く自然なものと見なすのであります。なぜなら、たしかに、偉大な人といふものはなかなか滿足することができないからであります。そして單に偏狹な道學者のみが、彼をとがめるのであります。けれども、それなら何故あなたは、婦人の中の偉大な人々をあざけるのでありますか。かりに一例として、女性全體がチョージ・サンドのやうな偉大な人であり、すべての婦人達が、リユークレシヤ、フロリアニーの樣な人格者であり、そしてそのすべての子供達が戀愛によつて出來た子であつて、しかしながらその子供達は、その智識とよい分別と、同時に眞の母親らしい熱誠を以つて育てられて居るといふことを一寸想像して見ようではありませんか。かうした事情では、世界はどうなるでありませうか。無論世の中は昔のやうに進步するでせうし、前のやうに發達するでありませう。さうして、それに對する不平は、おそらくは殆んどないことでありませう。

この女流作家のいふことは、全く正しい、ゲーテのしたことは、他の點では彼とはちつとも似てゐない他の多くの人々にも、過去に於て、又現在に於ても、なされつゝある。そしてその人々は、

それをなしたからといつて、社會に於てうとまれたり或は各譽をおとすこともないのである。

人の要求するところのすべてのものは、勿論善い地位であり、そして又、すべてのものがよく具備されてゐるといふことである。かうした社會の婦人が、かなりの自由を持つことばできても、全體としての彼等の地位は、男子のそれよりもずつと不利なところにあるといふことは事實である。故にサンドのやうな品性を持つてゐる婦人は、現在に於ては非常に稀であるといつてもよい。そして何等かの場合に、そのやうな狀態は不道德であるとみなされ、したがつてそれは社會によつて定められた道德律にそむき、又我々の社會狀態の性質に反對するのである。强制的の結婚は、ブルヂヨアの社會では、普通の結婚であり、兩性のたゞ一つの道德的結合であつて、他のすべての性的結合は、この見地からすれば、どんな場合に於ても不道德である。これはまことに尤もなことであるブルヂヨアの結婚は、財產と相續權とに最も密接な關係をもつてゐるから、世嗣ぎとして、嫡出の子を必要とする。それは子供を得るといふ目的のためにはじめられたのである。そして社會に現在行はれてゐる壓制によつて、支配階級の人々が、無財產の場合にもこれを强ひることのできるやうにしたのである。

けれど新しい社會に於て、我々が家具を重要なかたみとみなすのでなければ、分るべき何物もない。それ故に强制的結婚は、他の總ての點からと同じ樣に、此點から不必要もないであらう。故に婦人は全然自由である。その家庭及び子供は、彼の女の自由を束縛するどころか、むしろ生涯のなぐさめを增すのである。敎育者、友人、若い女性などが、彼の女が助を要する場合には、いつもよろこんでしてくれる。

恐らくは將來に於ては、次の樣にいつたフンボルトに共鳴する男子があらう。彼はいつた「私は、家族の父になる爲に生れては來なかつた。それ處ではない、私は結婚は罪であると考へる。そして子供を得るといふことは、犯罪である思ふ。」と。

それは何の事であらうか。併し自然的衝動の力

は、平均を保つであらうから、我々は現在理想の社會に於て、人類が自ら消滅するといふことは、豫言した處のヴオン●ハルトマンや、メイラーンダーの哲學的懐疑に迷はされる必要はないのである。

又一方には、ラッセルが次のやうにいつて居るのは、全く正しいのである。「人間は、自分達は自然法の外にあるといふことを、思ふことをやめなければならない。人類はつひには、自分達の思想や行動を導く法則をさがすことを始めなければならないし、そして又その法則にしたがつて、自分の生活をなし始めなければならないのである。その結果は次のやうであらう。卽ち彼はもう自分の仲間や、家族や、國家に對する關係を、昔ながらの法則によつて支配するのではなく、自然の本能の合理的な法則によつてなすであらう。現在に於ては、さまざまのものから補はれてゐる政治、道德、善惡の法則等は、これからはただ自然法にしたがつてのみ定められるであらう。價値ある人間生活は――その事については永い間寓話として話されてゐたが――ついに現實とならう。(K●K譯)

御挨拶

誌上で失禮で御座りますが、新婦人協會の會員の方に一言御挨拶を申上げます。

協會が創立になりましてから一ヶ年間、色々の點で御配慮や御同情に預りまして誠に有難う御座いました。

先月號で協會から御發表になりましたやうに、私は此後協會の役員を辭し、七月の末に渡米する事になりました。

假令一時でも協會を離れる事は、殊に協會の基礎も出來てゐない今協會を去るといふ事は、私としては可成堪へがたい事でありましたが、色々な點から考へて、今は外遊に最も適當な機會だと思はれましたので、強いてこれを決行する事に致しました。

私が協會を去るにつきまして、協會の方々から「功勞者」として色々な企てをいたゞいてゐるやうで御座いますが、其の御芳志は辱う存じますが、私自身としては心苦しく思つて居ります。私が今迄働いたことゝいふのは云はゞ自分の滿足の爲めでありますし、それに事業の半に去るので、功勞どころか、むしろ會員の方々の信頼に背いた事になり、ほんとうにすまないと存じて居ります。此點はどうぞ御許しを願ひ上げますそのかはり此度歸朝しましたら十分その償ひをさせていたゞき度いと思つて居ります。

尤も渡米しましても、別にいゝ事もありますまいが、まあ先方の婦人運動や勞働運動等から、多少のヒントが得られれば幸だ位に思つて居ります。

渡米中の通信は主として讀賣新聞紙にする事になつて居りますが、本誌にも時々寄稿したい積りで居ります。

又御目にかゝりますまでどうぞ御機嫌よろしく。協會が益々隆盛ならむ事を御祈り致します。早々

大正十年六月廿五日

東京市外巣鴨町宮仲二二五二

市川房枝

婦人運動批判

婦人運動と議會政策其他

土田杏村

今書く事は新婦人協會の仕事の遣り方には利益で無い言ひ方であるかも知れない。併し今自分は此の事を卒直に言つて見たい。

一　婦人運動と議會政策

我國の婦人運動者の議論を讀んで見ると、其の政策の建て方はお互ひに幾つかの相違點を持つて居る極めて保守的な、形骸だけの政策論から、社會革命的直接行動論の其れに至るまで、其の戰線の全幅は主として男子側で主張して居る政策論より遙かに廣いものとなつて居る。其の中で新婦人協會は、最近の主なる活動に於ては穩和的議會政策を取つて來られた。

私は此の穩和的議會政策を見て、實は內心では贊成したい心持ちも、反對したい心持ちも、兩方共々に持つて居た次第である。

協會が議會政策を取るといふ事は、確かに一の意義を持つて居る。(卒直に言はして貰ふが)其れは從

來甚だ漠然と、たゞ氣分だけの上で唱へられて居た樣な婦人解放運動の上に、一つの客觀的表現形式を與へたといふ事だ。此れが精神内の單なる氣分であらうと、或は又外部に表現せられての客觀的形式であらうと、此れを主張するものゝ眞劍さや、其の主張の深さやには何の相違もある筈が無い。又他の社會全體に及ぼす影響を考へて見ても、此の兩者は本來的に何れが優れて居ると、斷定出來る事では無い其れにも拘らず、私が協會の運動の場合に其の意義を認めるといふのは、其れが特に我國の婦人運動だからであつた。婦人參政權への第一步が愈々議會へ現れて來たと言へば、流石保守的の政治家や地方有力者やも、「愈々議論だけでは無い。事實が足もとまで來て居るのだな」といふ感じを持つ。某婦人會風の生ぬるい氣分を持つた婦人達も、同樣にして幾分の進步を見るだらう。兎に角新聞の上などで騷がれれば騷がれる程、事實的には其れが中心運動で無いにしても、勢ひ婦人運動の中心問題である樣な外貌を呈する。此れが餘程の利得だ。婦人運動は玆に一擧にして長尺の背延びをやつた事になる。斯ういふ運動は一度遣り出した上は繼續して行かないと意味が無くなる。勝つても負けてもしつこく續けるといふ事が意味を持つて來る。甚だ非理性的な、いやな事だが、我國の運動はかうしないと都合が惡い。

協會の遣つた仕事は、先づ一つのレコードを作つたといふ事だ。其れ以外、其れ以上、何の意義も無い。結果は勿論失敗に終つた。又よし其の議案が通過して見た處で、今の樣な婦人達ならば、さう大した利益を受けないし、又道理の分つた婦人ならば、今のまゝでも結構立派を運動をやつて居る。どの道同じ事だ。たゞかうして運動に多大の時間を取られて居る會員諸氏の勢力濫費(?)だけは、實にお氣の毒な事であつた。

穩和的議會政策の意義は以上の如く消極的のものである。其れが協會の遣る處であらうと、或は又他の團體の爲す處であらうと、私はいつも此れだけの意味をしか其の中に見て居ない。

處が今回の協會の運動には、私は實に其れ以上の意義を認めて居た。此れも亦消極的のものには相違

無いが、結果に於ては今後餘程重大のものを齎らすに相違無いと考へられる、或は重要の一物である。其れは何であるか。協會員が現在の下らない議員を訪問せられたり、招待せられたりして居る中に、自然に濃厚に自己の中に蓄積せられた「議員といふ連中は全く以て棒にも箸にもかゝらぬ太々しい奴だ。此んな愚劣な連中も珍らしい事だ」といふ體驗である。其れは屹度今後何等かの芽を伸ばすであらう。勞働運動に携はつて居る人達の言動を見て居ると、近來次第々々に直接行動肯定論者になつて來る。其れは議論で無い體驗が、此の方向を取らせたのだ。現在の代議士ぐらゐ時勢を知らない、否寧ろ道理を知らないものは、實際珍らしい。あれが地方の有識者の代表者なのかと思ふと、腹が立つより寧ろ噴き出したくなる。さうした議員連中の間を飛び廻つて居られた協會員の屈辱の感情が、私は何より痛々しい。誰れかゞ一度は遣つて置いてよい事だが、さて其れを自分が遣るのだと思ふと、私なら屹度、多大の犠牲だ、勢力濫費だといふ感じから逃れ得なかつた事であらうと思ふ。其れは甚だ利己的の動機の様に見えるが、今の處私は此の利己心を克服し得ぬのである。さて協會員が此の運動を一回遣り通したといふ事で、自分の胸中には、議論だけで無い、其の貴とい體驗を蓄積せられた。其れが運動の何よりの實效であつた。

地方の若々しい青年は、今や全く舊式の政治家に依頼して居ない。代議士運動などには眼もくれない問題は其んな處に無いと言つて居る。彼等は戸主で無いし、又よし戸主であつても其の財産は澤山で無い。徹底的の普通選擧が行はれるでなければ此の人達は政治に參與する事が出來ない筈である。其れにも拘らず彼等は地方政治の實權を握らうと今動き出して居る。現在の代議士連中が參つて了ひ、此の若い青年達の前に頭を下げる日は遠からず來る。其れは脅し文句で無い、全くの事實なのだ。

漸進運動もよいが、其の漸進の爲め進歩の途上につまらない障害物を殘し々々するのはいけないと思ふ。此れは却て目的の爲め手段を犠牲に供するものだ。改造は極めて徹底的でなければならぬ。協會員

は此の強く刻み込まれた體驗を持して、新らしい人は新らしい人同志の結び付きを遣つて欲しい。そして今の様な道理の分らぬ議員を總交迭やる運動に力を盡して欲しい。婦人參政權問題などは新らしい人達の政治社會になれば、立ち處に解決せられる問題である。私は大抵の事情の下では社會革命に反對する。舊と新との勢力が五分々々だとか、舊の力が強よ過ぎるとかいふ場合に、多少の無理をしてやる運動が暴力的社會革命である。併し今の政治社會の廓清位には、其んな暴力などは必要で無い。新の力は今幾らでも增殖して行つて居る。「俺れも此の苦がい體驗を持つ事になつた。」「俺れもだ」といつて參加して來る人の數が見る間に殖えて行つて居るのだ。何の苦も無く舊が新に代る時期の來る事は、眼前に見えて居る。新婦人協會員が其の新人の聯盟運動に參加する事を希望する。

二　虐げらるゝ女學生

現在の出版物の中で最もくだらないものは所謂大新聞であらうが、さて其れに次ぐものは婦人雜誌だ此うした雜誌しか讀む事の出來ない現在の女學生はみじめである。小學生と及び女學校を卒業した奥さんに就いては今言ふ事を擴張しないけれども、高等女學校程度の學校に通つて居る若い女學生諸氏は、一體何といふ雜誌を讀めばよいのか、氣の毒千萬の事だ。

近來女學生は讀書の範圍が大分廣くつたさうであるが、其れでも讀むものは大抵知れて居る。先づ小說類が主である。處で此れは學校當局が餘り歡迎しないといふ。女學生も其の教師も、若奥さまも貴婦人も、等しく公然と讀んで居られるのは、何といつても婦人雜誌なのだ。

だが其の所謂婦人雜誌なるものゝ如何に低級なる事よ。先づ彼等婦人雜誌購讀者の中心興味を喚ぶものは何かといふと、言ふまでも無く連載家庭小說である。併し其の小說は題材から言つても描寫から言つても、所謂通俗小說であつて、一般文藝のレヴエルへは出る事の出來ないものだ。今ごろ單行本の「不如歸」を讀んで居ようものなら、餘程時勢後れの様に言つて人は笑ふかも知れないけれども、此の連載

家庭小説は『不如歸』に比較して一體何の特色を持たう。
婦人雜誌はなほ話の筋の面白い所謂告白物を載せる事に苦心競爭して居るが、其の何れを讀んで見ても、此れは女學生の生活の肉にならうと考へられる樣なものに一つだつて出くはさない。新聞の單なる三面記事である。しかも其の告白物には男子に誘惑せられた、きはどい描寫の話などが益々歡迎せられる樣になつて來て、婦人雜誌は滔々として墮落の淵に沈んで行く。

雜誌自身の墮落するのは一向構はないとして、其れを讀む女學生の生活を思ふと氣の毒に堪へない。殊に此の墮落は近來性慾問題の論ぜられると共に、一層ひどいものになつて來た。婦人墮落の經路を性慾の問題にまで換元して、甚だきはどい描寫をやつて得意になつて居るのなどを見る、と其れを讀む純眞な女學生の心の動搖を思うて私は眞に戰慄を感ずる。

性慾の事を知つて居る既婚婦人でさへも、あんな文章を讀めば妙な感情を持つ。況んや其れを無垢な女學生が讀むのだ。何といふ危險な婦人雜誌であらう。

女學生だけに向けられた美しい婦人雜誌が欲しい。學校では片苦しい婦人道徳を敎へられて伸びる芽を啄まれ、社會では危險なる婦人雜誌に導かれて狂ほしい生長を遂げる現在の若い女學生はみじめなものだ。女學生が本來的に持つて居る美しい感情を其のまゝ素直に伸ばし育て、本當に高い香りをつて居る藝術や思想や道徳やへ、何の窮屈さも無く其の能力を伸ばさせてやる機會をつくる樣な、さうした婦人雜誌は生れないものであらうか。かうした女學生の雜誌には社會問題の取扱ひなどは先づ當分必要で無い。又育兒や料理やの記事も其れほど必要だとは思へぬ。女學生は實際其んな事に餘り興味を持つては居ないし、又女學生の時代に一生懸命に敎へ込まねばならぬ問題では無い。其れよりは女學生の精神內容が大切だ。高い香りの文藝や思想やの分かる鑑賞力が大切だ。さうした事に何の陶冶も加へられないで居て、人形の樣に結婚し、婦人雜誌の連載家庭小説を愛讀して其の發行を待ら焦れて居る、現在婦

人の大部分の精神生活の貧弱さよ。又さうした事には何の感激も湧かない現在の女子教育家の精神生活の貧弱さよ。

一時少年少女雜誌が此れと同じ運命を持たされて居た。悲哀小說だとか忍術物語だとか、いろ〳〵の名前の下らないものが載つて居て、徒らに子供の弱點を引き伸ばして居た。其れが近頃は餘程に改良せられ、童謠だとか自由畫だとか氣持ちのよいものが載る樣になつた。童話も大分に香りが高くなつた。よい物は終に勝利を占めたのである。

誰れか虐げられたる女學生の爲めに現在の婦人雜誌に挑戰狀を發しようとする勇氣を持つた婦人は無いか。（六、一九稿）

婦人運動の倫理的特色

一條忠衞

一

人間が社會的生活をして行くには、一定の目的といふものがある。この目的に準つて人格を實現しなければならない。けれども、この目的といふものは時代によつて意義が異るから、絕えず新しいものに更へて行かなければならない。これが謂ゆる道德の進歩といふものであつて、これを社會的に實行することが謂ゆる倫理運動と稱せられるものである。それが政治に現はれる場合には政治運動となり、經濟に現

はれる場合には經濟運動となり、女子の性に現はれる場合には婦人運動となるのである。それで此等の運動は倫理運動の一種であるから、その進歩は道德の進歩と步調を一にして居るのである。隨つて道德の進步しない社會では政治運動も進步せず、婦人運動も成功しないものである。だから吾々は先づ婦人運動を成功させるには、倫理道德の進步を圖ることを前提としなければならない。

歐米諸國の婦人運動を見るに、頗る進步した點があり、幾多の成功を奏して居るが、その原因を調べて見れば悉くその社會の道德の發達に起因して居る。女性の同盟が强固に出來上つて、仕事ができはきと運ばれて氣持よく行して居るのは、總て道德の賜になつて居る。女子の道德心が强固があるから、人格の欲念が强く、自由の精神に富んで居る。至善の判斷も、情操の評價も的確で健全であるから、女子としてこの人生に於て進むべき目的がはつきりと描き出されて、何んな困難に際會してもへこたれぬ心になつて居る。男子の橫暴に對しても、法律の束縛に對しても、正義公正の欲念から割り出して斷々乎として進むの慨がある。斯樣に人格的自覺が鮮明であるから、これを人に鼓吹し宣傳する精神も熱烈であり、又宣傳を受けて蹶起する團結心も堅く、その運動に必要な經費の工面にも萬策を盡すといふ風習である。これは見上げた倫理運動であつて、羨ましい次第である。

併し斯う外國の婦人を擔いで褒め立てるといふことは、自重心がないやうで自國の婦人に對して氣持を惡くさせるばかりでなく、自らも氣持の惡いことである。そこで考へ直して見るに、我が日本の女子も過去とは隨分勇ましかつた。平安朝時代には殊に元氣であつた。別に人格とか自覺とかいふ倫理學を知つて居た譯ではなかつたが、それに相當する道德的觀念であつて、今日の謂ゆる人格的自覺で可成り發達して居た。然るに世は戰國となり男子の武斷政策が施行さるるに至つて、女子は弱い者にされて了つた。けれども、まだ德川時代には懷劍とか薙刀とかいふ凶器を帶ぶと活氣ついて、男子を凹ますことも數々あつたが、明治の世になり法律ですつかり頭を抑へつけられた結果は、甚だしい柔弱なものになり、全

く骨抜にされた。それでこれは日本の女子で意氣地のない結果から來たものではなくて、源平の政爭以來男子が戰爭狂となつて喧嘩の準備にばかり汲々して居つた爲めに、女子で甚大な被害を蒙つたことに濫觴するものである。そこで現在の日本女子はこの損傷された天性を取り還さなければならない事情がある。女子がその天眞を出成されて居る現狀を打壞し突破することが、婦人運動の急務である。これは日本に於ける婦人運動の序幕として第一着に手を下さなければならぬ前提である。私はこの前提を三つに分けて考へて見たい。

二

第一は人格的觀念を養ふことである。日本の婦人運動が豫期に反して屢々裏切られる困危に遭ふのは一般の女子の人格的觀念が明瞭でない爲めである。それを明瞭に意識して居る先覺の女子が假に數萬人居るとしても、幾千萬といふ女子は意識して居ないのであるから、女子の進むべき人生の目的といふものは何だか一切解らずに生活して居るのである。つまり一般の女子がその個性を發揮して人格を完成しなければならぬ理論上の知識や感情を有つて居ない爲めに、婦人運動の目的が現解されないのである女子の人格的修養に於て個人的訓練が出來て居ないだめに、婦人運動が當々と隊伍を調べて歩めないのである。前を向く者もあり、後を向いて居る者もあり、列から飛び出して勝手に歩き出す者もあると云ふ散々な爲體であつて、銘々の目的が異るから一直線に收まらないのである。これは何うしても普遍的な人格的觀念の上から猛烈な電氣をかけて人格活動の分子式を統一し、人生の至善的目的を指示して同一步調に訓練するより外に手段がない。日本の婦人運動とは先づこの點が第一に着眼さるべき點かと思ふ。

第二は宣傳を盛大にすることである。女子の人格的觀念を培養するには、文敎學前の杓子定規でやつて居る小學校や女學校の敎育では駄目であるから、これは何うしても婦人運動に俟つより外に妙案がな

い先づ機關雜誌は勿論、講演、パンフレット、威示運動、談話會、廣告、ビラ等あらゆる文明的手段に訴へて、女子の人格的觀念の養成に努力しなけたばならない。殊に一枚ビラは盛にくばつて人の集る場所へは必ずぶら下げて置いて、婦人運動の印象を深く與へなければならない。それから樂隊なり、提燈なり、旗なり、自動車なりで繰り出して、毎日曜のやうに屋外運動を試みることが必要である。辻説法なども大に遣るべきである。かうして何んな手段でもよいから、婦人運動の倫理的存在を雄辯に廣告して、民衆に靈感を與へることが大切である。何事でも活氣が銷沈して居ては駄目だから、景氣よく陽氣立つて愉快な氣分に溢れて、全部の女子を吸ひ込むやうな手段を講じなければならない。婦人運動に加盟することは如何にも樂しく、如何にも肩身が廣く、急に女性の眞價を如實に體驗する有樣をあり〱と見せつけなければならない。そして此の信樂の世界を山村僻地にまで招介して、慶福を共に頒つためには、あらゆる宣傳に向つて會員は全力を注がなければならない。

第三には協同の倫理としての團結心を養ふことである。女子の先覺者が婦人運動の宣傳に從事しても多くの女子に團結心がなければこれに參加しない。銘々勝手な事を言つて、我儘な振舞をして居れば、何時になつても協同の仕事が成就される折がない。殊に自分の名譽になることや勢力を張り出すことにばかり勘付いて、互に鎬を削つて先驅功名を爭つて居つては、團體事業としての婦人運動は目茶苦茶である。自分よりも優越な同性を認めることを嫌つて居ながら、自分ばかり優越者として認められたいと願ふ矛盾者が多くては、婦人運動も何もあつたものではない。一寸した事で癪に觸つたり、僅かな事で脱會したり、何の理由もないのに入會を拒んだりして居る有樣では、肝腎な婦人運動の方はお留守になつて、婦人の喧嘩が本職にならぬとも限らない。殊に日本の社會は古來より專制政治の國であるからお上と謂はれる御主君の嚴命によるのでなければ何事でも團結しない習慣があり、一個人から申込まれた條件などでは縦令その事は如何に善い事であつても、何とか言つて疵をつけて壞さうと努める。打角輕

りかけた團體的行動が何かの譯から譯もなく木端微塵に打つ壞れて了ふのはその結果である。これは個人的訓練の足らぬ結果として利己的な主我的な世界に墮ち込んだ爲めに協同の倫理の觀念がなく、何か强大な恐ろしい權威によつて不可抗力的に壓迫される場合でなければ、自ら進んで他人の善に參加することが出來ない精神狀態である。これは實に打唾すべき習俗である。

今日の日本には婦人の團體が可成り殖えたやうだが、何うもそれ等には聯絡も統一もないやうである婦人會と婦人會とが睨め合つて一方を惡く貶しつけて、その力を剝ぎ取らうとするやうにも見える。良く捌けて一人で多くの團體の會員をも兼ねて、各自の特色を發揮させて遣つて、更に女性の總同盟に於て統一團結して、女子の人格的活動を完成させることに熱心が足りないやうに見える。これは舊幕時代の諸大名が各藩地に割據して意張り散らして居た餘風かも知れないが、何うも苦々しい態度である。これは協同の倫理の零な光景であるから、お互に改めて行かなければならぬ點である。婦人會と婦人會とは同じ高嶺の月を目的として居るものと解して、多少の嫌みはお互に耐へ合ふてあつさり捌けて、最後の目的に向つて大きく結束して欲しいものである。一方の婦人會に運動費が足りない時には一方で融通して遣る位までに義俠心と云ふものがなければ駄目である。

婦人運動は團體運動であるから、團結心といふ社會道德がなく、協同の倫理の精神がなければ、如何なる事も出來ぬものであることを自得して、この公共善を嚴守しなければならない。隨つて女子の團體運動に加はらぬ行爲は協同の倫理に反する不道德行爲として擯斥して差支がない。これを不適德でないと思つて舊慣の奴隷につて甘んじて居る場合には、その過てる理由を證據立てゝ反省を促さなければならない。

運動費用なども會員に團結心さへあれば、自然に出て來る筈のものである。一圓づつ出し合つても一萬人あれば一萬圓、十萬人ならだ十萬圓になる。當座の費用を作るには、特志家の寄附を仰ぐのも結構

だが、婦人會が自動的に出て營業部を設けて何か商賣でも始めたら何うか。仲立取次業、裁縫屋、洗濯屋飯屋、婦人下宿屋、看護婦會、婦人法律相談所など遣つて見れば遣れさうなものが澤山ある。それで當座の費用は何とかして工面して、先づ婦人運動の前提としての以上三ヶ條の運動に取りかゝらねばならない。婦人運動は倫理運動の一種であるから、最初にさうした土臺の道徳が各個人の上に出來上つて居ないと、本式の運動に臨んで多大の困難を生ずると思ふ。これは婦人運動の倫理的特色として私の深く感ずる點である。

將來の婦人運動と新婦人協會

奥　榮一

過去一年間、新婦人協會の齎したアトモスフキアに對して、私の思想はずつと左傾した立場に立つてゐる事を見出す。從つて協會の事業に對しても、比較的その内情に通じてゐただけに、無理もないといふ辯解を私自身の中に見出し乍らも、なほ且つ不滿を語らなければならない事を遺憾に思ふ。

協會が創立當時に發表した宣言書に對しては、私としては反對すべき何物もない。たゞその冒頭にある「婦人も又そのその正しき義務と權利の遂行のために團結すべき時が來ました」といふ言葉を讀んだ時に、其の權利と義務といふ言葉が、無論在來用ひられてゐるやうな法律上の用語としてよりも、ずつと廣い意味に用ひられてゐるものであるといふ事は解つてゐたが、來るべき新社會の寄與者としての新婦人の標語としては、餘りに外的な、硬化した感じを其の第一印象としてうける事を餘儀なくされた事を憶ひ起こす。さうして協會の事業を見るに及んで更にその印象を明かにせずには居られない。

新婦人協會の事業と云えば、私はまづ治警第五條の徹廢運動を憶ひ出す。治警第五條の如き法文はむろん現在の婦人にとつて其の政治的或ひは社會的發達を阻害してゐる事は云ふ迄もないが、然し乍らたゞひたすらに現在の議會、現在の政治家に請願と懇願の手段に依つてのみそれを求めやうにすることは、現在の政治に對して激しい不滿を持つた私としては、一種のいら立たしい感情に打たれずには居られない。自らをコンデセントする事に慣らされたる婦人よ、私は新婦人協會の名に依つてそれをおもひ浮べる事を悲しむ。我等は斯くの如き惡法の存在を、自ら拒みうる新しき政治、新しき社會組織を何故に直接求めてはならないのであらう。

既にその崩壞を急ぎつゝあるブルヂョア及び男子專制の文明を救濟するものは、やがて生れやうとしてゐる二人の新しい人格者、勞働者と婦人であらなければならない。私は知識階級や、また多くの男子に依つて叫ばれてゐるやうな勞働者或ひは婦人の指導救濟といふやうな言葉は何人の名に依つても許さない。彼等はこの二人の人格者の生活に、その身を潜め思ひをくゞらすに依つて、新しい安住所を見出さなければならない。目醒めたる婦人は、現在の男性にとつて豫言者であり、救世主であらなければならない。

斯うした期待を持つて、私は新婦人協會の機關雜誌女性同盟を見る時に、遺憾乍ら失望の嘆聲を漏らさゞるを得ない。それは來るべき社會生活の暗示を示すべく、餘りに在來のビヂネス、ウーマンのあはたゞしい姿に滿たされてゐる。現在の協會にそれを要めるといふ事が無理ならば、せめてその芽生でも見せて欲しいと思ふ。それにもしほんとうに日本の多數の婦人が、目覺めてゐるものならば、多過ぎる程ある現在の婦人雜誌は、それ等の人々にとつては何の興味も引かない、否、むしろ反感に價する程、婦人それ自身の地位を卑しめたものであらなければならない。この場合、協會が奴隷的地位に慣らされた婦人そのまゝ姿を見るやうな現在の雜誌に對して、未來の婦人を暗示する雜誌を持つ事は、それ自ら

婦人の力の宣傳であるばかりでなく、又協會の經濟的立場から見ても現在の婦人雜誌の無限の購買力を蠶食することも無意義なことではあるまい。

協會の經濟は、主として一般特志者の寄附と會員の會費とに依るものであるさうであるが、私はこの際協會が何故今一歩進んで協會それ自身が生產的事業を企てないのであらうかと思ふ。例へば、婦人問題に關する書籍の出版業、或ひは小規模の印刷工場、其他現在の婦人の手で企て易いいろ〳〵な企業の存在を考へる事は必ずしも夢想ではあるまい。それは、婦人の社會的存在を承認させる一個のデモストレーションであるばかりでなく、其の經濟的基礎の確立に依つて、更に徹底した反ブルジョア、反男子專制の運動にその旗幟を色づける一つの重大な要素であると思ふ。

我々は最早脂粉と虛名に彩色せられた多くの婦人團體に、一瞥の興味をもつなぐ事は出來ない。新しく生きんとする全ての運動は、舊世界へのコースを全然持捨てゝ、新世界への勇敢なコースを見出さなければならない。協會の宣言書に書かれてゐる母性及兒童の保護、敎育の均等、或ひは花柳病者の結婚制限の如きも、これを現在の政治及社會制度をその儘承認してそれに訴へやうとするよりも、現在の制度や組織を回轉させる事に依つて、當然さうした存在を實現させる事に努めるのが、より多く效果ある事ではあるまいか。新しい生命を創造するためには、陳き殼を打破るより外ない。例へば敎育問題に於ても、現在の小學敎育が、人間としてその兒童を無限に過まりつゝある事を考へれば、現在の如き敎育方針のもとに無數の學校を作る事よりも、敎育そのものゝほんとうの意義を、多數の人間の心理により多く浸潤させる事が遙かに必要なことである。政治問題でも、社會問題でも同じことだと思ふ。

勞働運動が、ともすると殺伐と慘忍に傾かうとする時に當つて、その新しき道伴である婦人運動が、愛の名に依る廣き意味の藝術運動としてその伴奏をとる事も、無意義な事だとは思はない。愛、それは奪はれたる婦人に殘された殆んど唯一の美點である。云ふまでもなく私はその究極に於て男女に區別さ

るべき二つの心を信じない、たゞその文化のプロセスとして、二つのコースを信ずる者である。
新婦人協會が在來の外面的な運動にかへるにより內面的な個々の完成に意を注ぐと云ふ事は今の場合私は協會の爲めに悅ぶべき現象であると思ふ。さうして徒に自らを知らざる下根の徒の慢罵に傷つけられる事なしに、その內在力を深く培ふ事に寄つて、再び澎湃とし溢れる力を示されん事を望んで止まない。

赤瀾會が出現する事に依つて、それを新婦人協會に比較して多くの興味を以て見られてゐる。曾て一年前に大向ふの喝采を博した新婦人協會が、その人氣を赤瀾會に奪はれた事に私は何の痛痒を感じないと同樣に、赤瀾會が大向ふの喝采を博してゐる事にも、何の喜びをも感じない。たゞ私は、赤瀾會の人々がいたづらに新婦人協會に對して批難の矢を放つといふ事に、首肯し難い點を持つてゐる。男子の勞働運動に比して、勢力の微弱な婦人運動に於ては、況んや人間心理の問題として、より困難な位置に置かれてゐる現在としては婦人相互の間に於ては許し得るかぎり提携を惜しまない事が必要であらうと思ふ。曾て排他的色彩の非常に强い社會主義者が、その同盟を組織するに當つて意外の寬大さを示した事を喜んでゐる私は、將來の婦人運動のために、赤瀾會の狹量を惜しむものである。

勞働運動に依つて必然に婦人運動は救はれると一部の急進論者は云つてゐる、果してさうであらうか世界を回轉させる二つ缺くべからざる車轉として少くとも現在に於ては勞働運動に婦人運動を對立させる事は過去の男子專制に慣らされた一個の男子として、私自身の心臟の拒み得ない處である。

婦人運動の物理的條件

長谷川如是閑

運動といふものは物理的の運動でも人間的の運動でも總て不平から起る。それを逆に考へると、運動が不平から起つたとして、それに物理的の原因によるものと、物理以外の原因によるものとがあるわけである。人間的といつたのは物理以外の場合を假りにさういつたのであるが、所謂婦人運動、それはいづれに屬するのであらうか。自然科學の上で物理的といふ事の中には、婦人運動の入らぬことは明かであるが、社會科學的にいふ物理的といふ範圍内に婦人運動が含まれる事はなからうか。

通常人間的といふ事は今いつたやうに物理的でない事を意味して居るのであるが、私はこの言葉の用方を正確ではないと思ふ。人間の運動は人間以外の運動と同じく、廣い意味の物理的運動である場合が多く、又さうでないと本當に運動といふ意味をなさないのではないかと思ふ。

人間は意識的動物だから、單純に觀念的に運動を起す場合が決してないのではない。例へば群衆が火災の恐れのあるやうな建物の中にむらがつてゐた場合には、その人々の多數の頭には、火災がこの中から起つたら大變だと思ふ考へが起る。その時非常にそれを強く感じてゐる人がゐて、大きな聲で「火事が起つたら大變だ」と云つたとする。それを一部の人が聞き違へて、火事と思つて走り出すとすると、必らず全體の人が動搖を來して「火事だ火事だ」といつて走り出るに違ひない。この場合の運動は全く觀念的であつて何等物理的原因でない。無論火事云々といつた音波は物理的原因であるが、火事といふ物

理的原因のなかつた事は慥かである。卽ち運動は空想から起つたのである。婦人運動もかういふ風にして起る事も必ずしもないとは云へない。然しそれは空想の火事から起つた運動がものにならない如く空想から起つた婦人運動はおそらくものにならない。例へば男女同權といふやうな間違つた事實若しくは間違ひのない哲學によつて起つた、空想的婦人運動は、決してものにならない。その事は明治の初めにフランスの平等思想の感染を受けて起つた男女同權論が、運動として效果がなかつたといふ事實によつても明かである。勿論さういふ空想を起させる事情、卽ち火事の場合の例でいへば、建物が火事の恐れがあるといふ事實は、空想の火事によつて自覺されて、その改造を促がすものとなるのであるから、空想的運動も、全然效果のない事ではない。男女同權の主張も、現在の不合理を自覺せしめるには多大の效果があつた。然し本當の婦人運動は更にそれに物理的條件が加はらねばならない。

この意味に於ける物理的條件としては、經濟生活の外に何もないといつてもよからうと思ふ。さうだとすると、婦人運動も婦人の生活の經濟的條件に刺激されて起つたものでなければ、決してものにならないと思ふ。總ての運動がさうであるが、殊に婦人の場合には、二重にさうでなければならない事情がある。第一に男子の生活が社會的、經濟的に立してゐるに、女子の生活は全く性的に限定されてゐる。家庭生活、保育者としての生活、そんなものに限られた生活は性的の生活である。これが破らるゝには全く經濟事情によるの外はない。第二には婦人の場合も男子の場合と同じ事情であるが、それは卽ち女子の社會的地位を獲得しようといふ運動である。そして男子の場合と同じく、經濟的優越を占むる運動に外ならない。第一の場合の經濟的條件といふのは、婦人が性的生活から浮び出す事が如何して可能になつたかといふと、社會の男子に與へた經濟的變化に基いてゐる。卽ち、一方では多數の男子が女子を經濟的に維持して行く事が出來なくなつたといふ事實が起つて來た。そこで女子は社會的に泳ぎ出さねばならなくなつた。それには體格、智能、技術等に於て、男子的に發達して行かなければならない。こ

の事實が女子の觀念に影響して、主として觀念生活をしてゐる經濟的餘裕ある婦人の間に思想的にその事が考へられてきた。これが婦人運動の必然的の原因である。

第二の場合は社會的に泳ぎ出すには、丁度男子の勞働者がさうしようとして忽ち資本家と衝突を來たすやうに、女子は男子と衝突を來すのである。即ち男子の社會的優越に喰ひ込んでいつて、それだけ男子を征服する戰をしなければならない。而してその男女間の戰爭は知識の戰爭でなくして、勞働者對資本家の戰爭の如く、全くの經濟戰である。で、この戰に勝たんとするには、どうしても女子の地位の經濟的發展を條件とする。何故にその意味の婦人運動が有力になつたかといふに現在の產業に於ける婦人の地位が、急激に增進した爲めである。會社銀行に盛んに婦人が喰ひ込んでゆく、それは皆男子の經營だから男女の戰で男子がさういふ事をするのは自分がまける事なのであるが、經濟的必要(物理的條件)がそれを男子にさせるのである。即ち物理的條件によつて女子は一番男子を征服する。

これらの事情がなかつたなら、婦人運動はいつ迄たつても明治初年の同權運動程度たるにとゞまる。日本の現在の婦人運動に就いて、あまり實際のことを知らない私には、どういふ會なり團體なりの運動が、最もよく前述の大勢に乘じてゐるものが、正確に判斷する事は出來ないが、外部から見る所では、さういふ實際的の物理的力を動力としてゐる運動は、あまりないやうに思はれる。つまり同權運動かサッフレヂエト式の運動か漠然たる社會運動か、その邊の所らしく思はれるが、どうも單純の思想的根柢の上にたつのでは、金のない實業家と同じやうなもので、企業心が盛んでも、事業がものにならぬ恐れがある。物理的條件は、思想なんぞには構はず發展して、婦人をその居るべき地位におしよせる事、洪水が家を浮かしてしまふやうなものである。況んや、その物理的條件に根柢する思想がそれに伴つたならば、洪水が颶風によつて大波を起した如き勢となるのは必然である。

目下の所最もよく物質的條件を一番よく備へた國は英國であらう。戰爭中の男子の缺乏から女子があ

らゆる生産、管理經營までに立入つて、いづれも男子に劣らぬ成績を積み上げたこの形勢は、男子が戰爭から歸つた爲めによほど縮少されたが、然も一旦物理的根據を得たといふ事實、その事實に立脚した思想は、決してあともどりはしない。平和に歸つた後の女子失職は、男子の失職に劣らぬといふ有力な社會問題となるのは當然である。これが同國の政治家の大いなる憂ひとなつてゐるが、さういふ經濟的條件を自覺しない婦人、即ち漠然たる思想上の根柢しか持たぬ者は、かういふ婦人の運動を理解する資格はない。

英國の外務省で、婦人は一切外交官に採用しないといふ宣言をしたゞけでも、同國に於て、婦人の地位がどんな風に考へられてゐるかゞ察せられる。或婦人運動家はそれに對して、男子がそんな事をいつてゐるのに、婦人選擧權の運動をして政治上から爭はうとして見たところでつまらんぢやないかと、いつてゐたと記憶するが、それは慥かに婦人運動の現在の形勢を暗示してゐるものだと思ふ。空漠と考へれば、いかなる運動も相當に理由もあらうし有力でもあると思はれるけれど、社會的に意義があり歷史を作る運動は、物理的條件をとらへたものでなければならないと觀察される。然し英國さへ婦人がさういふ慥かな物理的根據を得たのは最近のことであるから、日本に於てはまだ〳〵同權時代、サツフレイヂ時代を卒業した時代であるとはいはれないかも知れない。

一國の行政上では、男子は男子として、或は女子は女子として、何等特別の機能を有して居るのではない。否、自然の賜物は男女に等しく分與されてゐるので、總て男子の事業は、また總て女子の事業である。

（プラート）

問に答へて

□戀愛問題　□結婚問題　□家庭問題
□子供問題　□敎育問題　□生活問題
□其他一切の煩悶の御相談を歡迎します

信じ得ざる男子との結婚（問）

私は二十三歳になる女で、他に嫁してゐる一人の姉の扶助を受けて、某女學校に通つてをります。（弟も同樣の事情で就學してゐます。）もと私の家は某縣下でも屈指な豪家でしたが、父は放蕩にのみ過し、母はそれを憂ひて私達三人を連れて別居しましたが、その母は私が十八歳の時に歿し、父も改心はしたが續いて歿しましたので、私は全く姉の情で暮してゐる者です。それだのに私は何といふ淺ましい女でせう。當時帝大の選科學生であつた某といふ男と相思の仲になり、強い意志を以つてゐると思ひつつつひ妊娠の身となつてしまひました。男は事情を訴へて姉にまで結婚を申込みました。

それに對して姉から私に與れた手紙、それは私に取つては悲しいものでしたが、とにかく結婚は許してくれて、先方の家へ行つて通學さして貰へといふのです。所がこゝに又大變な事が起りました。それは男の德性の問題です。男は帝大に入る前に某府立中學校敎員を二年間勤めた事もあつて、相當な男に見へますが、女性に對しての操行はそれは亂れたもので今までに既に二人の女と結婚し、五六人の情婦をもち、三人の女に姙娠させてゐるといふ事を發見しました。（子供は皆死にました。）男はもう浮氣はしないと頻りに私に誓つてゐますが、何で信用が出來ませう。私は將來の幸福などは思ひも寄りません。そして此事は姉は少しも知らないのです。私は身の處置を考へましたこの結婚を止めますと私は學校を退學して姉の家の者となり、勝手な不義をした女、恩知らずと云はれてゐなくてはなりません。それよりは一そその男と結婚して學校を卒業し、世に立つ資格を得た上で離緣を取り、姉への恩報じに弟の學校卒業までの學資なりとも私の手から貢ぐやうにしか、何方にかしなければならないか。何うすれば良いか分からなくて當惑してをります。どうしたらていいでせう

（本鄕の一女子）

（答）

未成熟な靑年男女の間には、眞の戀愛が起り得ないとは、必らずしもいへないでせう。しかしながら、未成熟は無智を意味するとせば、人物を洞察する力のない未成熟者の戀は、得て將來の悔恨の種になるやうな場合が多いともいへます。私は今、貴女が某なる男子を知つた年齡を知りませんが、その男の以前の素行をやつと今頃になつて分つたといふ所から見て、年齡が幾つであつたにせよ、貴女はまだ未成熟な女であつたといひます。しかし私は、未成熟な女が戀をしたのを喫驚に咎めたてしやうといふ者ではありません。勿論戀は婦人のみならず男子にとつても、極めて重大な經驗であり、また一生の一大事であるだけ、出來得る限り完全なる形に造り上げればならないとは思つてゐます。それにはどうしても、所謂一寸惚れといふやうな單なる出來心や、または男子の感能本意の誘惑の儘となるといふやうな、輕卒な戀をしない程の、一個の成人になるべきことを、戀をする前の必要條件として要求したいと思ひます。今貴女の場合を見ると、判斷力も理性もない若い處女が、感能的な、惡くいへば獸慾的な男子の誘惑にまんまと引つかゝつて　處女にありがちなロマンチックな精神的戀愛の時代といふものも知らず、直に姙娠したといふ事になつてゐます。しかしこれは、今日の女學校の如き意志の修養を顧みない敎育を受けてゐる女にとつては、貴女のみならず誰でも

が動物的な男子の誘惑の網から免れる事は殆ど不可能であると思ひますから、貴女の戀をした事に對しては、この位ゐのことで止めておきませう。

所で男が貴女に向つて今後浮氣をしないと誓つたのに、貴女がそれを信用されないといふことは、誠に悲しい事です。御來示の如き、女性に對して、いはば前科者である事を知つては、如何にその男が誓つたとて、中中に信用出來ないといふのも尤もな事とは思ひます。しかし貴女も二十三にもなつてゐるのですから、もう男の心も相當に見拔く力が出來ていい筈です。そしたら、その男が本當に信用出來るか出來ないかを、もう一度觀察して見られる事を先づお勸めします。そしてもし、どうしても信用出來ないと知つたらば、その男を去るか、また信用出來る男にまで貴方がその男か造り上げようと努力するか、この二つの道のどちらかを選ぶ外はありません。

別れようといふ場合は、貴女が愛し得ないといふのと同じです。愛し得ない事が眞に分つて、なほ結婚しようといふ事は男に對して不幸であるばかりでなく、貴女自身を欺き、貴女自身を、やがて、涙の谷に陷れる事です。男を信用出來るまでに造り上げやうといふ事は、愛の上乘なるもので、如何に不純なる男子も、女の愛の力のみは、これを純化する力をもつてゐるものです。ですから、某なる男の善惡か如何ともあれ、その悔恨と誓言とが心より發せられたとすれば、それは貴女の純愛の力に外なりません。

もしそれを信じ得たならば、その努力、つまりその强愛の持續によつては、その崩れ易き男の心を、一個の信用し得る精神に迄造り上げる事ば敢て困難とは思ひません。戀愛を完成させるといふ事は、かういふ意味にのみ用ゐられていいと信じます。

貴女はその男を愛し得るか否かな考へて見る事が、今何よりも先決問題であつてその他の事は、實は第二第三の事に過ぎないのに氣づきませんか。

然るに、貴女は今その中心を外れて、結婚しようか、しまいかと迷ふといふ事は貴女が貴女自身の心を知らないといふものです。そして全く世間といふものによつて自分を見ようとしてゐるに過ぎないのです。況んや、その男と形式的に自他を僞いて、一度結婚して學校を卒業する便利を得、その上で離婚をしようなどと始めから自分の結婚をまるで政略的、遊戲的に取扱ふといふやうな事は言語道斷といはねばなりません。

貴女が、扶養をうけた姉上の事を慕ふ心は、さもあるべきです。不承不承にせよ姉上がその結婚を許した以許上、一女はその男を愛し得るならば、男の舊事を忘れて結婚しその結婚生活を完全に造り上げる事によつて、姉に對する恩に酬ゆる事が出來るでありませう。

私は、その男が姉にまで結婚を申し込んだといふ、割合に眞劍らしい態度を見てまた所謂前科に改悛の心の萌していゝ頃とも思へば、その男の誓を信用していゝやうに感じます。信用出來ないのは貴女が愛し得ないためではないかとさへ思ひます。私は繰返して、貴女自身の愛をお考へなさいと勸める外にいふべき言葉を知りません。

身體上に於ける男女對等

自由なる運動が、男子にその身長を與へ、運動の制限が婦人の體格、體力及び健康の劣等なる所以の原因であるからには、婦人の健康增進の爲めに運動遊戲を奬勵する現代の趨勢が繼續するに於ては、兩性間の現在の差異は減少するであらう而して婦人が、幾代か必要なる年代の間男子と同樣なる有利の境遇を得たならば、身體の發達上、男子と同等の程度に進むであらうと云ふ結論は避け難き所である。

（デンスモーア）

海內婦人界

■京都市婦人聯合會　京都市に於ける婦人團體の主なるもの七十餘聯會して京都市婦人聯合會を組織し八日午後三時より府立第二高女校にて創立委員會を開いた

■宇和島高女同盟休校　宇和島高女三年生四十三名は轉任を命ぜられたる三好敎論の留任及び校風刷新の希望を校長中谷清七郎氏に申出で去月二十五日より同盟休校し四年生の大部分も加盟して紛擾中であつたが調査によれば右は同校前敎論及び三好敎論の煽動と判明し父兄等は生徒を慰撫する一方校長に陳謝し無事に解決した、

■婦人問題講演會　赤爛會の婦人問題講演會は十一日午後一時から神田靑年會館で催された。講演者は久津見房、堺眞柄曾根貞代、伊藤野枝、山川菊枝の諸女史の外藤森成吉、江口渙、石川三四郎の諸氏。聽衆は學生が主で・婦人は約七百名ほゞ滿場立錐の餘地もなかつた、

■新婦人協會總會　新婦人協會の第一回總會は十二日午後二時から丸の內中央亭に開かれた。來會者は約三十名、奥むめお氏の開會の辭に始まり、山田美部氏の座長、政治法律部社會部等の報告やら規約の改訂、研究部の組織變更、役員の改選、文藝部の新設等に關する報告があつた會員同志の意見など自由に交換し夜は貧しい乍ら樂しく晩餐のテーブルについた。

■圖書館員養生　文部省の社會敎育課では圖書館員敎習所を作り男女圖書館員を養生する事に決し、去る一日から來年三月まで約四十週年間其の敎育をする。資格は中學校及女學校卒業程度、定員は三十名であるが今度は三十六名、中三名は婦人である。

■浮浪兒の增加　少石川坂下町幼少年保護所にて取扱ひたる浮浪兒は一昨年頃まで三四千であつたが、昨年から急に激增四千七百三十四人となり、今年は更に增加新入人員一月四十三人、二月五十四人三月六十二人、四月五十二人、五月は既に六十人に及んだ中、扶養者に引渡した者四十九、職業紹介七十九、感化院に入れた者十六、逃亡廿一其他は同所にて保護を加へつゝあると。

■市社會局の幼少年保護所　市社會局にては去る一日より市外池袋に「幼少年保護所」を開き、收容定員百名、期間五十日、八歲位より十八歲位までの浮浪少年を收容し修身讀書等の課目を敎へる由。

■市託兒所竣工　本所江東橋際に新築中であつた東京市託兒所はこの程工事竣工十日より子供を預ることゝなつた收容人員百五十名、託兒料一日二錢萬事幼稚園式で。主任には米國歸朝者梶塚要子氏が任命された。

■經濟講演會　男爵島津夫人等を後援とする家事改良會では經濟的知識を與へる爲め、生産消費に關する經濟學を通俗的に一般に講演することゝなり本月から八月末まで市內各小學校で巡回講演をするとの事、講師は棚橋源太郎三輪田元道野中正其他の諸氏

■通勤女中の紹介　東京府中央工業勞働紹介所では通勤女中無料紹介の新事業を目下計畫中である。いまゝで私營の通勤女中紹介業を開始したものはあるが、紹介料として日給の一割五分を雇主と女中との双方から徴收するために雇主に取つても亦女中にとつても著しい不便と不利益であると共に之に關聯して種々の弊害が伴ふて居るので、一切の弊を矯正する目的で無料紹介を開始せんとするものであると。

■文藝夏期講習會　小石川白山東洋大學文藝研究會では七月十日から十六日まで文藝夏期講習會を開催する筈である。學科講師は

▲新生の現象(日本文學に於ける)文學士垣內松三氏□チルターペーター作文藝復興の講義文學士田部重治氏(以上午前)□生活と哲學文學博士得能文氏□德川時代の好色本に就て文學博士藤村作氏□未定和辻哲郎氏□分裂と統一垣內文學士□ダンテに就て阿部次郎氏□近代文學に現はれたる享樂主義、吉田絃二郎氏□長谷川二葉亭と北村透谷、島崎藤村(以上午後)

■女子夏期大學　婦人に大學敎育普及の目的を以て國民新聞社にては左の規定により夏期大學を開く。

□期日七月廿八日より八月四日迄□場所神田一ツ橋女子職業學校大講堂△資格婦人なれば何人にてもよし△聽講料金五圓△申込期限七月二十日限り△申込手續住所姓名を明記したる申込書に聽講料を添へ京橋區日吉町國民新聞社へ申込まるべし、法律講座(穗積重遠氏)△經濟講座(堀江歸一氏)政治學講座(永井柳太郎氏)△哲學講座(紀平正美氏)△文明史講座(松村武雄氏)△女權史講座(大山郁夫氏)△優生學講座(山內繁雄氏)△兒童學講座(生江孝元氏)△文藝講座(長谷川天溪氏)

■北陸婦人聯合大會　大阪朝日新聞社後援にて、北陸四十三婦人團體聯合大會は去る五日福井市にて開會京都帝大敎授野上俊夫氏の「日本と歐米」と題する講演其他種々の催しあり非常の盛會であつた

海外婦人界

■獨逸に於ける婦人参政權 歐洲大戰前は獨逸及各歐洲先進諸國に於ても同樣政治上の男女同權は是認せられさうにもかつた、當時獨逸に於て社會民主黨員のほかは男女同權の根本的必要を一般には認められなかつたのである、

社會民主黨の婦人は道徳的に彼等の維持をなしたが婦人参政權を得ノが爲には他の特殊の團體を必要となすに至つた。其欲求に應じて教育協會が組織され同時に中流社會の婦人は婦人参政會に加入した其婦人参政會なるものは嚴しは存在したがやがて婦人團體は進歩的國民自由黨の內に組織された 彼等は運動と資財の自由はあつたが强熱的に参政權を得んが爲に運動しなかつた。

歐洲大戰開始され多數の婦人は公共事業及職業に從事したが直に何等の權利をも獲得しなかつた、併し乍ら一九一八年十一月九日共和政府成立しその初宣言に於て婦人選擧權が認められた。其爲婦人が歡喜する餘地無き程當時國家は危機にあつた一九二一年即ち今年二月二十日に行はれた選擧の結果は議員總員四二一員のうち三十六員だけ婦人が選ばれたのである其うち二十二名は社會民主黨員である獨立黨員は總數二十二人で婦人三名なり最初の新獨逸議會は一九二〇年六月六日に選擧され總員四六六名にして婦人總數は十三名にして社會黨員九名獨立黨員二名にして他は共産黨員であつた。

之等の婦人議員が如何なる興味あり且重大なる問題を議會に提出したかといふとそれは大體の豫想は裏切られてしまつたのである。彼等は主に食料職業四人問題等のみを議した、

故に尙婦人が事實上裁判公事職業等に於て全き男女同權同能力となるのは幾分の餘地がある、今中流階級の婦人團體は彼等の偏見によつて自ら破れてしまつたが他の團體は私生子問題を解決する爲に社會黨を選んだ、歐洲大戰はその結果として非常に重大なかゝる問題を婦人の肩にのせたのである。

母權保護といふ事は必要であり國家の義務なりといふ觀念は基礎をなく事は成功したのである又現在は青年保護案を通過させくと努力しつゝある該案は青年兒童の體育精神道德上の教育に關する事が含まれてゐる、歐洲大戰で虐待された兒童を回復せしむる結果を期待して努力しつゝあり。

■印度婦人の地位 印度在住の數百萬の印度人は移動せんとして居る。國家主義といふ波は國中に押しよせてゐる。而して自己尊敬の推進と目覺めたる過去の追憶とは印度人に獨立を迫るのである、今大英國の支配は挑戰されてゐる、公平な英國人によつて示されてきた種々の好意も時代も趨勢には何等の印象をもとゞめず忘れられてゐる。

かくの如き國に於て婦人は如何なる地位にあるかといふと西部地方の婦人は東洋の婦人は西洋婦人より下位にあり其地位は渠望的なものであるといふ觀念が一般に充滿を信じられてゐる、

社會組織は東西非常な差違があるが印度の婦人は英國の婦人が持つ如く印度に於ける事件に影響を與へるのである。印度は理想主義の中心でありかの國に於ては婦人が代々傳統を持續させ又世界何處の國に比しても共産主義が發達してゐるのであるが其も婦人の手によつて進歩されそれを生して行くのである、

性の同權は印度人の間に眞に實在してゐる。大學に於て婦人は男子と同期間に稱號を得られるのである又参政權も數年前に得た、かゝる特權は極めて少數の人々の間にのみ行はれてゐるといふのは事實で全人口の九十パーセントに教育は普及されず之は政府によつて否定されてゐるのであるから支配者の過誤であつて決して印度婦人の缺點といふ事は出來ない。國家主義の勃興に際しても婦人は可なりの活動をなし貢獻をなすところ大なのである。數千の教養された婦人も數百萬の教育さるべき機會を持ち得なかつた婦人等も同じ程度の狂熱を感じつゝ、彼等の光輝ある目的に達せんとしてゐるのである

須磨子、鎌子、榮子

胡床子

故濱田博士の一人娘濱田榮子の殺鼠劑自殺は都下の大新聞の三面を賑はしたばかりでなく、近頃稀に見る人氣種となりました。私は榮子の死の記事が表はれたとき、理由もなく須磨子と鎌子のことを聯想しました。何等の必然的連絡もなければまた似よつたとも思はれないのに、何となく思ひ浮んだので、三人のことを比較するといふのでなく、無系統に雜感を書き綴る氣になりました。

これを書いてゐる今は、また榮子の事について、各新聞が競つて各方面から材料を蒐集して、眞相を報道しようと努めてゐる時ですから、正しい判斷を下すには都合のいい時ではありません。しかし十目の見るところ畧觀察は一致してゐるやうにも見うけられます。あの記事が表はれた時、誰でもすぐ榮子に對して「死ぬには及ばなかつたではないか」と感じただらうと思ひます。他人の死に對して、それを多少でも是認したい氣持を起させる場合は、惡事の露顯を恐れてか、また悔いてかの自殺と、最近ちよい〱見た沒落した成金の悲觀自殺ぐらゐのものでありませう。しかし同じ自殺でも「死ぬには及ばないではないか」と思はせる程度は非常に段があると思ひます。

假りに須磨子の場合でいへば要するにいろ〱の議論はあつたやうですが、歸するところ、生命とたよる愛人に、俄かに先だたれ、生きて行く希望の綱が切れて後を追つた形で、死ぬには及ばないでないかと一度は思つて見ても、「無理ない事である、私でもああなるか知れない」ぐらゐに、その死にかなりの必然性を認めてやる氣持が誰の中にも混つたでせう。けれどもそれが勝利の死でなくて、

何となく悲痛なショックをすべての人に與へた所に、須磨子の死はやはり悲劇の大詰を思はせずにはおきませんでした。

　鎌子の情死の事件の時には鎌子に對する同情や辯護の議論は當時殆んど見當らぬ程でしたが、しかしそれは彼女が死に損つたといふ事が、非常に不利な原因にもなつたのだと私は思ひます。鎌子があの時倉持某と枕を並べて死んだならば、も少し違つた意見が現はれたかも知れません。不貞の妻、淫亂の女といふ月並の批評と、上流社會にあり勝ちの家庭生活の紊亂が生んだ結果であるといつて、罪を彼女以外に歸したものと、一方で華族の娘が、運轉手と心中したといふのを何となく痛快がつたものと、議論は凡てそこの三種の中へ入つたやうでした。それはとにかくそれが合意の情死であり、その一方が死んだといふので、何だかおめおめ一方を生き殘らせたくなかつたやうな心持さへいくらかしないでもありませんでした。

　それが榮子の場合には「死ぬには及ばないでないか」といふ心持が、殆ど無條件的に何人にも直感されたやうに思ひます。

　三人の死（鎌子は生き返つた）が與へた感じには大體こんな違ひがありましたが、三人三様の問題を提出して行つた事に變りはありませんでした。そして私達に問題を殘したところに、彼女等の死が社會の連帶責任として、何人にも無關心事ではなかつた筈でした。彼女達の殘した問題、それは彼女達がそれを解かうとして終に生命を賭けなければならなかつたやうに、吾々にとつても、今尚解けては居りません。

　彼女等は批評家たるには餘りに自我に執し實感に生きて行つた形がありました。批評家であり得なかつたところに悲劇役者となつた理由があると同時に、身を以て解決せんとして一つの波紋を社會に及ぼす役割を演ずるやうになつたのでもありました。彼女等は作家とはなり得なくて、いはば作中の主人公となつたのでした。私は彼女等がその役割に於て各々傑出した模範的の技倆を發揮したかどうかを論じつくす道を知りません。なぜならば彼女等の殘した問題は、あまりに廣汎でもあ

り多意義でもあると考へるからです。私は殊に今の時に當つて多くの議論家批評家を要求する一方で、沈默の實行家の多く出づることをも望むものです。殊に今日の場合に於て過度期的問題の中心をなすべき兩性問題――戀愛、結婚の問題に關聯した實際的主人公の出ることはどんなに望ましいでせう。實感や體驗の伴はぬ所謂議論や、またさういふ議論を表面的に受け容れての實行者ではなくて、もつと深い内部からのやむにやまれぬ人間性の發現としての勇敢な實行家は、新らしい社會の建設を促すにどれほど大きい役割をするか知れません。彼女等はさういふ意味に於て、犧牲の血を流してくれたとも見れるでせう。私はしかし、彼女のとつた態度を是認しようといふのでは勿論ありません。たゞああした實行家の必然的に演出した悲劇によつて、その議論よりも深刻な印象を殘したところに意義あることをいひたいだけです。

　須磨子や鎌子に就ては大抵議論もつきてしまつた事であるから他日に讓つて、たゞ榮子の死について感じたことを二三いつて見ませう。それも乏しい材料からの推察であつて、果して正鵠を得てゐるかどうかは分りませんから、單なる主觀論に過ぎないかも知れません。一人の人間がらの道を撰ぶといふには狂人でない限り、よく／＼の原因が重疊してゐるものである位ゐは想像出來ます。榮子に對しても法律とか財產とか名義とかいふやうなものをなぜ重視したのか、愛する男の充全な愛に浴してゐればそれで足りるのではないか、餘りに强慾である、戀愛價値を物質價値以下においた彼女は憐れむべき下劣な女性であるとは、一派の批評であり、私達にそれに近い感じを抱かせないでもありません。然し愛人の許を離れて、冷たい母の家にわざ／＼死んだといふ所には、彼女の勝氣らしい性格の然らしめた以外に、男の戀愛にも、ある記者のいつたやうに、不純な翳が少しもなかつたかどうかを思はせます。其は男自身も知らぬ程度のものであつたかも知れないし、又、其れ程人間に共通した兩性關係の間に起る運命の一つであるかも知れませんが。私はさうでない事を望むが、もし少しでもさういふ原因があつたとすれ

ば、彼女にとつては運命的の悲劇であつたといはれませう。

しかし矢張彼女の母や、彼女の母に味方する人人の舊觀念が彼女を殺したのだといふことが、最も理由あり、また最も廣く認めさせられることに違ひありません。因襲や制度やの舊觀念の犠牲になつたといふところに、彼女の弱さがあり、非難さるゝ理由となると同時に、私はここに彼女の人間らしさをも認めずに居られません。只管に愛人の後を追ふたと見ゆる、須磨子にすら、あの強い性行をもつてゐながら、因襲といはうか、一種の社會意識といはうか、とにかく彼女を許さないと見えるあの力に少しも壓しられなかつたと誰がいひ得るでせう。勝氣で可憐な――可憐なといふのは私の想像に過ぎないかも知れませんが――榮子が大きい因襲の壓迫の上に、恩愛のほだしにまでつまされては、あゝ辿つたのも無理ない處決でありませう。法律や母や義理が何であるかとは、誰でもいふことであり、考へることであります。實際愛ばかりでいゝ或場合には、母も世間も法律も顧みる餘裕はないと私も思ひます。しかし吾々人間は全きが上にも全きを欲する性をもつてゐることを思はねばなりません。恩愛や法律や世間は、現に彼女の觀念の中に生きてゐたことを思はねばなりません。彼女の願ふ愛の生活と、それらの觀念との間の不調和を、彼女が生一本であればあるだけかいばかりか痛く感じたに違ひありません。舊道徳との戰ひといふか所謂舊道徳は必らずしも彼女の外にあるのではなくて、彼女の中にあつたのです。しかし飜つて思へば、内なる舊道徳は外なる對象からの映象であつてさういふ意味では外なる對象が消えない限り、消えるものではありません。總ての舊きものとの戰ひといふことは、ロシヤやアメリカと戰ふとか、古い法律や因襲や道徳との戰ひとかいふことよりは、もつと深い意味即ち私達の内なる偶像との戰ひといふ意味があるやうに私には感じられるであります。榮子の人間らしさといふのはかういふ意味をも含めてです。

榮子の死の陰に榮子並に榮子の愛人の孰れかに少しでも物質的の慾望が潜んでゐたとすれば、私

はさういふ事を生命よりも大事に考へさせずにおかなかつた社會組織の不完全にまで否應なしに考へ及ばせます。まして彼女の母や母に味方する人達には榮子を許さぬといふ原因は明かに物質上の慾望から來てゐるものか大部分であると思ふ時、一層この感じは深まります。

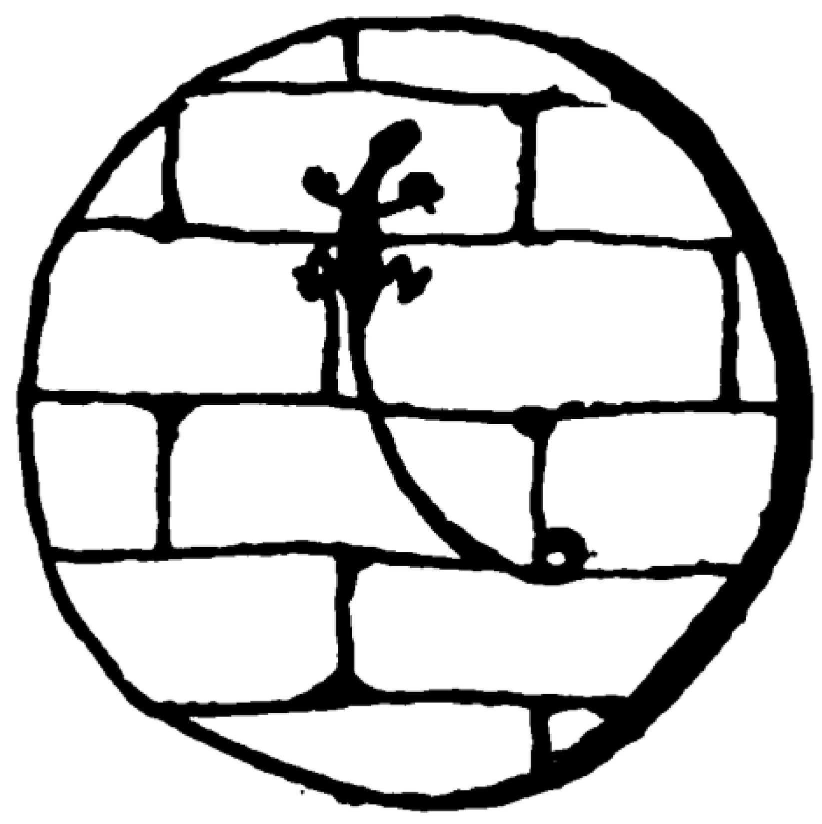
須磨子が或意味に於て戀の勝利者の悲劇といつたやうな死に方をした時、鎌子は飽くなき生の執着に徹して、第二の運轉手と同棲し、終に自然の死ともいふべき病に死にました。しかし若い榮子は所謂道德との戰ひに力つきて可憐な死を急いだのでした。縮緬のしごきで縊り、鐵道に死に損つて胃腸の病に罹れ、竊に殺鼠劑を服したといふ、三人三樣の死に方さへ、冗談でなくその性格を現はしてゐるやうにも思ひなされます。私は批評を下したのではなくどこまでも雜感として書いて見た積りです。

(この事件に就いてはいづれ今一度書きたいと思つてゐます)

原稿募集

論文　十五枚（四百字詰）
時事批判　長短隨意
小說　二十枚（四百字詰）
感想文その他隨評等
締切毎月十日
尙雜誌の內容や形式に就てどし／＼御批評を願ひます

編輯部



緑の窓より

鈴木紅美

□

待合室で隣りに腰掛けてゐる人の話を小耳にしたのですが、その話した人は染物屋の主人らしく「よく店へこの前と同じ色に染めてくれといつて對の布を持つて來る人があるが、しかしどんなにしたつて私どもが見て同じ色に染まることはないものですね」としみ〴〵いつてゐました。私はそれから山の手線の電車に乘つてふと窓の外を見ると雨に煙る若葉の鮮やかな木立が映りました。かうして年毎に自然は同じ緑で裝つてくれるのに、見てゐる私は年毎に——といふより時毎に——何といふ變り方ですべてのものを觀てゐることであらうかと、前の染物屋の話が妙に深く印象されてそれ以來、どんな瞬間でも再び繰り返されさうもない機會に思はれて、はかなくも懐しい時と事件の流れを、愚かしくも、貴いものに思ひ返す癖になりました。

□

怒り得ぬ寂しさと、笑ひ得ぬ寂しさと、どちらが不幸でせうか。快よき哄笑の出來ない人に、ともすれば陰險な人があるやうに、怒るべき時に笑ふやうな人にも氣の許せないことがあると思ひます。私はほんのちよつとした事に怒りたいことがあると同時に、どんなことも笑つてすませることが多くあります。怒つてゐる時は自分自身に對していひ樣もない不快を感ずると共に、笑つてすませた時もまた自分自身に唾でも吐いてやりたい嫌惡を感じます。けれど年と共に、色々の事を知る

と共に、怒れなくなるのが常ではないでせうか。年とつて怒りつぽくなるといふのは、心の正しい發育をした人ではないのでせう。本當の老人——それは成熟の意味を含めた——は、やはり寛濶な包容力のある人になることでせう。私はすべてを宥すの寛宏の心をもちたいと願ふけれど今までも怒り得ない方が勝つてゐたと思へば、心もちよく怒れるさがをどんに望んでゐるでせう。

□

詫びようと思ひ、また詫びなければならないと思つたことで、ふと機會を失したためにそれきりになつてしまふことがよくあります。機會を見つける聰明と敏感とは、私共の生活を圓滑にするにかなり重要なものだと思はれます。

□

私はもし人の價値を質の上で差等をつけるならば、知る知らないや、理解するしないやまた行爲に表はす表はさないといふやうな事によつてはしたくないと思ひます。それよりも大事なことは感ずる感じないといふことだと思ひます。感ずることにはかなりの度で質の差があるやうに思はれてなりません。けれどもその感じを表はすことの上手下手には勿論差等があります。この差等こそは度の差量の差であつて、質の差とは思ひたくありません。私は才氣走つた物知りより、默つてゐる敏感者の方をどんなに好むでせう。

□

自分の價値標準からではなしに、たゞ一般的評價から本を買ひ集めるやうになつて行く傾向を自分に見出したことを寂しく思ひます。

□

誰にも明し得ない經驗なり秘密なりを持つた人ほど寂しいものはないでせう。がまた一面からはさういふ人ほど強い人間はないとも考へられる時があります。

□

時折り、妻を娶つて幸福に暮してゐるといふ古い戀人が、その妻に死に別れて自分の懐に再び返つて來る日があるやうに空想して見ない人があるであらうか。それはシベリヤへ流されてゐる無期

懲役人が、何かの幸運で刑の輕減命令に出會し、故郷へ歸る日の來ることを空想するやうに。

□

人の名でも物の名でも草の名でも、どうしてさう呼ばなければならぬかなどゝ考へて行くと可笑しくなることがあるものです。世間の何々主義者といふ人達も、ちやうど植物の一新種が發見された時、植物學者によつて分類され命名されてしまへば、その名以外に呼ぶことができなくなると同じではないでせうか。人にも草にも名は必要なのでせう。けれど、名がなくても存在性のあることも時には私共は考へたい氣がします。

□

ダーウヰンは或る時溝の底に澱んでゐる泥を乾かして、百種以上の植物の發生を見た實驗をしたといふやうなことを嘗つて聞きました。溝の底の泥の中にそれだけの種子が埋れて生きてゐたといふことは、意味深いことに感じます。人間の伸びるべき傾向も無限に多いのではないかと思ひますたゞそれの發現の機會と從つて成長の機會とが與へられなかつたために、伸びるべきものも伸びずに終るのだと思ひます。人の賢愚は遺傳の要素が大きい部分を占めてゐることは疑ひないが、また一面からは、いかなる人も天才なる萠芽をもつて生れるものだと思ひます。私は未來の理想社會といふことを描いて見るたびに、このダーウヰンの實驗を思ひ浮べるのです。つまりその社會ではその人の持つてゐる天分が少しも埋れずに充分に伸びて、花を開き、匂ひを發散して、しかも調和してゐる狀態を考へるのです。徹底個人主義といふ言葉があるが、それはやはり、個人々々が内部に備へてゐる力のありたけを發現したことではないでせうか。兩性の問題も、今のところ人格價値の上で同等といはれますけれど、本當の兩性の職能はまだ未知の世界にあると思ひます。私は私達自身の本具の性質を本當に明かに見出し、それを確かに握つて、伸びるだけ伸ばすといふことが、すべて婦人運動の核心だと思ひたいのです。

女流詩人

——印度の情熱詩人サロジニ●ナイヅ夫人の英詩——

今井雄二

一

「人生は織り出される花毛氈のやうなものである、」とアナトールフランスは書いてゐるが、まことに吾々は神の意匠になる機（はた）に坐す處の織匠（はたおり）である。織つてから始めていろ〳〵な模様が現はれて來る。それまではどんな意匠が仕組まれてあるのか、固より神の心を知る事が出來ない。一筋づゝ細い絲を通してゆく筬（をさ）の閃きは吾々を過ぎゆく時間の分秒である。この瞬間を境として、織り出された部分は過去となつて現はれこれから織られる部分は未來となつて、隱されてゐる。或る人は孔雀模様の華やかな絹を、或人は淋しい勿忘草（わすれなぐさ）の花模様を織るであらう。また或る人は雅びやかな唐草模様の印度更紗を、はた哀しみの黑繻子を織り出す事であらう。人々は夫々己が神から與へられた布を織り上げて、それから墓場へ行く。或る人は長く織り、或る人は短く織る。それは神の豫定した運命の織物に外ならない。

赤いネルは生れ出る幼兒の小さい身體を包み、白絹はやがて墓へ埋められる人の冷やかな屍を包むかと思へば、赤いネルと白絹は生と死の象徴である。縺れ合つた經（たて）と緯（よこ）との糸に秘められた生と死と運命、歡喜と悲哀のさま〳〵なる象は、機を織る人々の胸に如何に響くであらうか。私はそんな事を思ふ毎に、次の小唄「印度の織匠（はたおり）」を忘れる事が出來ない。

Weavers, weaving at break of day,
Why do you weave a garment so gay?……
Blue as the wing of a halcyon wild,
We weave the robes of a new-born child.

Weavers, weaving at the fall of night,
Why do you weave a garment so bright?……
Like the plumes of a peacock, purple and green,

We weave the marriage-veils of a queen.
Weavers, weaving solemn and still,
What do you weave in the moonlight chill?......
White as a feather and white as a cloud,
W weave a dead man's funeral shroud.

（意譯）織匠が夜明けに美しい布を織つてゐる。何を織るのかと問へば、赤兒に着せる青い／＼翡翠のやうな衣を織るのだと答へる。

夜となつて、織匠は綺羅びやかな衣裳を織つてゐる。何を織るのかと問へば、綠と紫、女王が婚禮に召すヴェールを織るのだと答へる。

冷い月光の下に、織匠が默々と嚴かに機を織つてゐる。何を織るのかと問へば、羽毛や雲のやうに純白な葬ひの屍衣を織るのだと答へる。

これは印度の情熱的な詩人サロジニ、ナイヅ夫人の英詩中の一篇である。

二

最近の印度が生んだ英詩人で、共に記憶されねばならぬ人が二人ある。一人はタゴールで一人はナイヅ夫人である。この二人は、いつも並び批評されるのであつて、共に東洋的香りの高い魅力を有つ事は同じであるが、その表現する處は甚だしく異つてゐる。タゴールは神秘的、瞑想的であり、ナイツ夫人は情熱的、感覺的である。前者は哲學者の詩であり、老年の詩であり、靜寂の詩であるに反し、後者は、人間の詩であり、若人の詩であり、燃燒の詩である。前者を憂欝な印度の大森林に譬へるならば、後者は明るい太陽の下に咲き出た眞紅な罌粟の花である。それ程兩者は印度の哲學的な方面と情熱的な方面とを代表してゐるやうに思はれる。「現代詩人の研究」の中で、スタージヨン女史は、タゴールとナイヅ夫人とに就て

「彼等は二人共詩人の家に生れ、共に傷く由緒あるベンガルの家に育ち、共に東西兩洋の敎化を受け、共に同じ藝術の道に携りながら、何故なれば斯くも異るのであらうか。」

と云つてゐる。思ふに印度は一面に於て極めて神秘的であると同時に、他方面に於て甚だしく情熱的である。此兩面は全然融和せぬ兩極に立つものであつてタゴールの瞑想が印度の象徴であると同時に、ナイヅ夫人の情火はまた印度の象徴であら

ねばならぬ。

彼等二人の中、先きに英國の文壇に紹介されたのは、ナイヅ夫人である。それは一九〇五年の事で、即ち今から十六年前、彼女の魔女詩集「黄金の閾」（The Golden Threshold）がハイネマン社から出版せられた。それから後、今日までに「時間の鳥」（The Bird of Time）と、「破れたる翅」（The Broken Wing）と云ふ二詩集が出版されてゐるだけで、これをタゴールの數多い著作に比べるときは頗る乏しいものと云はなければならない。それにも拘らず英國の詩壇は、夫人を迎ふるに甚だ重いものがあつた。若い印度の女性であると云ふ事が一般の視聽を喚起した重要な原因であつたかも知れぬ。然しながらそれよりも本質的に夫人の詩に深刻な價値のあつた事は何人も否む事が出來ないであらう。

三

英國に於て、夫人の天才を見出して、いとも熱心に導いてくれた著名の文學者が二人ある。一人はエドマンド、ゴッスで、もう一人は、アーサ、シモンズである。ゴッスもシモンズも、共に英國文壇の權威であつて、この二大批評家の手に彼女が托せられた事は、非常な幸運であつた。最初の詩集「黄金の閾」の出版を勵めたのもシモンズであつて、それにはシモンズの美しい序文が載つてゐる。恰度伊藤白蓮夫人の歌集「踏繪」にある佐々木信綱氏の美しい序文を想はせるやうなものである。我等はその中にナイヅ夫人が、シモンズに書き送つた書簡の斷片を見、それによつて可なり詳しく夫人の生ひ立ちを知る事が出來るのである。

ナイヅ夫人の家は印度の名門で、代々梵語學者であり、禪宗に似た瑜伽教の信者として知られてゐた。彼女は書いてゐる。

「私の祖先は數千年の長い間、森林や山洞の愛好者でありましたまた大なる夢想家、學者、難行苦業をする人でありました。父は自身また大なる夢想者で、而も偉い人でありましたが、その生涯はあはれ失敗でありました。思ふに印度の何處へ行つても父程學に深く、又父ほど人に好かれたものはありますまい。彼は白い髯とホーマーのやうな顔を有つてゐて、笑ふときは、屋根も落ちるかと思はれるばかりであります。父は金錢を二大目的の爲めに費しました。一は他を助ける事で一は錬金術であり

ます。それでお庭には、物を乞ひに集つた乞食や聖者や無徒などで一ぱいでありました。そして又夜となく晝となく錬金の試驗に沒頭してゐました。然しこの錬金と云ふのは詩人が「美」に對する憧憬の物質的表現に過ぎないのであります。「黄金の作者と詩の作者、」これは神秘に對する欲求を動かす二大創造者であります、父にとつて、科學上の好奇の天分は、私にとつては、美に對する欲求であつたのであります」

かやうな父は、エディンバラ大學の博士號を有する科學者であつて、又印度ヒデラバットにあるニザム大學の創立者である。母は若い時にベンガル語で抒情詩などを書いた事があると云ふ。ナイヅ夫人はその長女として、一八七九年二月十三日ヒデラバットで生れた。多勢の弟妹たちと共に幼い時から英語を敎へられたが、彼女は頑固でともすればそこを厭ふて勉强しなかつた。すると曾て叱つた事のない父が或日彼女を一室に閉ぢ込めて折檻した。彼女はそれに感憤して、その日から兩親にさへ英語ばかりを用ひて喋るやうになつたと云ふ事である。幼時から已にその感激性の強い處が見えてゐて、彼女の母は、「物靜かな、然し恐ろしく意地の強い子供」だと云つてゐたさうである。

夫人はその頃から非常に夢想的な性格が豊かであつた。父は彼女を科學者殊に數學家にする考へであつたらしく、極めて嚴格なる科學的敎育を施さうとした。けれども、彼女の性格に植ゑつけられた詩の衝動が、本能的に眼覺めて來るのをどうする事も出來なかつた。それは十一の時であつた彼女は課せられた代數の難問を前にして吐息を洩してゐると、偶然にも或るインスピレーションに襲はれて、一篇の詩を書き上げた。

「この日から私の詩の經歷は始まつたのであります。」と彼女はいつてゐる。十三の時「湖上の夫人」といふ千三百行の詰を六日間で書き上げ、また二千行の戯曲をも書いたさうである。その爲めに彼女の健康は失はれて、暫くは一切の讀書を醫者から嚴禁されてゐた。十四から十六の間は彼女にとつて最も多端な時代であつた。大抵の讀書はこの間に爲されたし、同時に小說も書けば詩歌の筆も採つたのである。のみならず彼女は十五のとき熱烈な戀の苦惱に陷ちた。現に彼女の夫たるナイヅ博士は戀の對象であつたが、二人の間には階級の

相違があつた。ナイツ博士の家は、古く由緒ある印度の名門であつたとはいへ、それは彼女の家のやうに婆羅門宗徒ではなかつた。印度に於てはこの階級思想が最も嚴しいのであつて、その爲めに二人の結婚は兩家に於て猛烈な反對を受けて、到底成功の望みはなかつた。それで翌年十六のとき不本意ながらも遠く英國に送られて、其處に四年間學校生活を送つた。然し又ひどく健康を害したので、伊太利などを旅行しつゝ衰へた體軀を抱いて、再びヒデラバツトへ歸つて來た。そして斷乎として階級を飛びこえて戀人の許に走りとう／＼これと結婚してしまつた。これをわが白蓮夫人の選んだ道と較べてみると、其處に自づから自我の强さの相違があるのを感ずる。二人の詩歌を讀み比べてみても、白蓮夫人は强いやうでも、ナイツ夫人に比して感傷的な弱さを見せてゐる處が多いやうである。

四

ナイツ夫人が十六で始めて英國に留學した時、間もなくゴッスに紹介されて、その家に近づくやうになつた。ゴッスは、彼女が詩を作る事を知つてその詩稿を手にしてみると、之れは技巧に秀れ文法も定しく、感覺も瑕なく、形の上では立派に整つたものであつたが、その中に全く個性の發動がない爲めに、詩としての眞價が怪まれた。感情や幻想は彼女のものではなくして、テニスンやシエリの借り物に過ぎなかつたので、ゴッスも失望したが、彼女の若さと熱心とに動かされて、いとも懇切なる忠告を與へて彼は云つた。「英國の血潮で僞り彩つたその詩稿を屑籠に投じ、轉じて貴女の郷土の情熱と神祕の上に新しき詩の道を開拓せよ西歐の知更鳥と雲雀と教會の鐘とを棄てゝ、熱帶の野に生へる花と果實と樹木とを歌へ。更に簡明に云へば、純然たる印度詩人たるべく、英國古典の模倣者となる勿れ。」と。

恁う云ふ一言は、彼女にとつて洵の詩に入る黄金の閾を指し示すものであつた。天才的に彼女は忽ちその個性に眼覺めて、其處にほんたうの詩へ踏入つたものである。

それで彼女は、最初の詩集を、この黄金の閾を

示してくれたゴッスに獻じてゐる。

五

これから少しく彼女の詩に就て書かう。

夫人の詩集三卷を通じて、最も多く歌はれてゐるのは、「愛」と「運命」の詩である。愛は生を、運命は死を示す。生に對する愛執と慾求が強いだけそれ丈死に對する意識が明かである。それは丁度、光線が強ければ從つて陰影が濃いのと同じであるこゝに山宮允氏の譯された「報償」と云ふナイッ夫人の詩を拜借する。夫人はこれに於て、「愛」と「眞理」と「詩」とに對する渇仰を歌つてゐる。

野と森には
春の賜物、
鷹と鷲には
翼の誇り、
豹には美容、
鳩には數々の色
あはれ基督、我れには
愛の歡喜(よろこび)を。
海士の手には
海の寶玉、
花婿の眼には
花嫁の顏、
夢想者(ゆめみるもの)の心には
青春の夢。
我れには、基督、
眞理の歡喜(よろこび)を。
牧師と豫言者には
信條の歡喜(よろこび)、
國王と勇士には
光輝ある行爲(おこなひ)、
又服(したが)へられし者には平和
又強き者には希望、
我れには、基督、
歌の歡喜(よろこび)を。

——山宮允氏著「詩文研究」より——

この熱心な内的欲求——その燃ゆるやうな熱情を盛るべく、彼女の身體は餘りに纖弱であつた。彼女は幾度びか病魔に侵され、幾度びか「死」を眼のあたりに見た。「苦惱の神へ」と云ふ一篇の詩に次のやうに歌つてゐる。私はその詩の大意だけを書く。

惱みの神は長い間私をその慘虐な殿堂に尼僧として引き止めてゐる。私は止むを得ずその前に伏して拜する。私は長くその奉仕に堪へて來た。悲しい日も眠られぬ夜も私は苦惱の殿堂に祭典を行うて來た。黑い祭壇に捧げられたのは香油でもない、乳でもない、米でもない、實にわが魂である。わが青春の甘い欲求である。わが肉體から搾らるゝ油である。花のやうな夢、寶石のやうな希望の焰である。私はそれ以上何も苦惱の神に捧ぐべきものを有たぬ。私の中に有するものは凡て虐げられ、寂しい祈禱は歌ひ盡された。この上はいざ神よ、われを暗き陰に誘ひ行て睡眠に落させ給へ。

かくて彼女の見た死はあまりに明かな、そしてあまりに嚴肅で冷酷な事實であつた。死に對する情熱詩人の心を次のやうに歌つてゐる。

待てしばし死よ　われは死する能はず
崩え出でし希望の刈り採られず
歡喜の藏められず　歌の歌ひ盡されず
はた涙のいまだ流れ竭きざる限りは

待てしばし　わが心ゆくまで
愛欲さ悲哀に　はた地とみ空に
わが人間の飢餓の充たさゝるまで
あはれ死よ　死する能はず

「わが人間の飢餓の充たるゝまで死する能はず」何んと强い生の執着であらう。而もこの熱烈な愛欲が昂ずれば、生は反つて苦惱となる。一人の戀人を有つ事さへ、燃え立つ情火に堪へられなくなつて導う――

君逝かば我れは泣くまじ
哀しき胸はいみじく憩らふ
夢なき眠りに閉されて
君が胸なる花環の中に
幸福にはた心なごみて
若し君逝かば

その熱烈な愛の歌は、運命と云ふ黑い影を曳いて、數多く三卷の詩集の中に燃えてゐる。その情熱の奥の深い陰影は、夫人が自ら體驗した苦惱の殘影である。若し夫に人燃えるやうなこの情熱がなかつたら、運命の暗い影は、これ程迄濃くはなかつたらう、其處に我々は夫人の詩の深さと强さとを感ずるものである。

かうした運命と愛とが相表裏した詩の他に、なほ夫人には印度の情調を扱つた詩が數多くある。

それ等の或るものは、愛と運命の詩の中にもよく滲み出てゐると同時に、それを離れて、ただ甘い懐しい異國情緒のみが漂ふものが尠くない。殊に夫人の初期の作——丁度ゴッスの忠言に従つて作つた頃の作に多いが、それを評して紹介するのは難かしい事だから止める。

六

ナイヅ夫人はシモンズに宛てた書簡の一節に書いてゐる。「私の詩の理想がどれ程高い處にあるのか御存じでせう。で私の折にふれてものした貧弱な詩の小曲は、私自身には少しも美しいとは思はれません。私はほんたうの詩人ではありません。私には幻影と欲求とは十分にありますが、それを歌ふべき言葉が足りません。若し私がたつた一つでも、ほんたうに美しくそして偉大な精神に充ちた詩を書く事が出來たなら、私は永遠に口を閉づる事でせう。悲しい哉私はただ小鳥が囀づるやうに歌ふのみで、その詩を正に蟋蟀のそれの如く儚ないものであります。」これに對してシモンズは、「これ等の小曲が價値のあるのは、この小鳥のやうな處にあるのだと私は思ふ。一種捉へ難い、いみじき手段によつて、まれな東洋氣質を、西歐の言葉で云ひ表はしてゐる。それは東洋の情緒を悉く表現してゐるのではないか、確かにその心髓を表はしてゐると私は思ふ。それでその中には東洋的な魅力があるのだ。」と云つてゐる。

この寶玉のやうな詩を數多生んだ小鳥は燃えるやうな情熱を詩に托してわづかに自ら慰めてゐるのである。

忘れ得ぬ人

三宅やす子

（一）

「何でも無かつたのよ。ちつとも何といふ事は無かつたのだけれど、私には今でも忘れられない人がありますの」

お千賀（ちか）さんがシンミリして、私に斯樣話した。

「伺ひ度いわね。面白さうなお話ね」

「面白くは無いでせう。戀でも何でも無いのですもの。だけれど、そんな淡い思ひが、何故かいつ迄も忘れられなくて、今でも時々、思ひ出してホロリとする事があるから不思議よ」

お千賀さんは、遠い昔を想ひ出す樣なウツトリした眼をした。

「だから、前置き許りしないで話して下さいな」と私は促さないでは居られなかつた。

「私が女學校の五年の時分家によく來る文科の學生があつたのよ。父が知人から頼まれて保證人になつて居たもので、よく種々な用事でも來ましたし、用が無くても日曜や休暇にはよく話しに來たのでした。私にもよくいろ〳〵文學の話なんぞをしましたつけ、私は温和しい其人を決して嫌ひでは無かつたけれ

ど、大して好きでたまらないと云ふ程でも無かつたの」
「女學校の五年と云へば、もう頭が、可なり實際的に進んでますからね。詩の樣な戀に醉ふと云つた樣な幻影を追つては居ませんわ、卒業したら理想の家庭を作らうとか何とかそんな事を考へてますから、若い學生と接近したつて、其人の背後の事情が、自分の氣に入らない條件を具へて居れば戀になんぞ陷ちませんものね」
「斯樣云へば隨分薄情な女だと御思ひになるでせう、だけれど、實際、其人――Kつて云ひました――の家は、昔からの大きな呉服問屋で、それが其人の父の代になつて、だん〳〵失敗して、昔からの大きな財產も可なりなくなつて了つたといふのでした。其跡取の一人息子が、家の業を嫌つて、哲學なんぞやり出したのですから、家ぢやあビク〳〵もので居るんですつて、そして大學を卒業したら何でも故鄕に歸つて貰はなければならないつて云ふのですつて、それが當人にはたまらない苦痛らしかつたのですけれど、温和しい親孝行な人ですから卒業證書を握ると同時に、金釦の制服を新調の脊廣に着かへて、寂しく故鄕に歸りました」
「其時の樣子を私は、涙なしには思ひ出されませんの、學生時代の寫眞を一葉宅に持つて來て、『これが樂しかつた學生時代の記念です』と云つて呉れましたの、それを『左樣』と云つた樣な輕い氣持で受取つて、『御機嫌よう』で別れたのですけれどね、それから故鄕に歸つて寂しい生活――親や兄弟との賑やかな生活でしたけれど精神的には全く孤獨な生活だつたに相違ありません――を送つて居る人からの折々の消息を讀んでから、初めて、東京を離れる時の、あの人の苦しい心持を察しましたわ、そして、歸る時に、『またいつか上京する時もありませうから、其時製本させますから』と云つて一行李雜誌の樣なものを預けて行つた心持にも同情しましたわ」
「よく短いたよりが來ました、俳句が好きで、便りの端には俳句が書いてありました。でも、だん〳〵

月日が經つてゆくに從つて、都會に憧れる情熱と云つた樣な匂ひがだん〳〵薄れてゆく樣なのが短い便りにも知れました。それ程、其人の周圍は寂しく刺戟に乏しいものなのだらうと同情の心持も出ないのでは無かつたのですけれど、私には、もう左樣した田舍くさい便りが、何の興味もよばない樣になつて了つて、つい、返事も忘れ勝ちになるのでした」

「Kからの便りがだん〳〵遠のいて來たと思つたのも僅かの間で、やがて、私の頭の中にはKの影なんぞ跡も留めない樣になりました。若い處女の胸を轟かす樣な強い刺戟が都會の生活には澤山ありますもの。忘れた時分に、忘れて居たKからの便りが來ました。其便りは、今迄の俳句交りの閑文字ではなくて一つの事件の報告でした。一つの事件、それは云ふ迄もなく、Kの結婚でした。

私は好奇心の眼を輝かして、幾度も其數行の字を讀み返しました。想つて居る人でもないし想はれ樣とも思はなかつた人の結婚が、何でも無い樣なもの丶、私は一寸寂しい氣持を味はせられました。よく誰にでもある樣に、此人も、家庭を作ると同時に、いやに親父くさくなつて、異性には端書一本書く勇氣の無い樣な人になつて了ふのだらうかと考へたら、待たなかつた便りでも、これからは見られなくなる事が寂しく思はれるのでした。私達の交際は、新らしいお嫁さんから厭な氣持で見られる樣な關係では決してないけれど、もし、妻への氣兼から文通も絕えると云ふ樣な事になれば、物足りないと思ひました」「まさかそんな事は無からう、家との關係だから全く無沙汰にして濟むものではない、なんて、解釋して居た私の豫想を裏切つて、その簡單な結婚の報告以來、Kからの消息は何ケ月たつてもありませんでした。都が戀しいの、新らしい知識がどうのと云つて居た事も、もうさつぱりと忘れて、雪深い田舍の小さな家庭を樂天地にして納まつて居るのだらうと思ふと、青春の希望といふものがどんなに果敢ないものかを知らされる樣になつたのでしたが、それから間もなく、人傳に、Kがお父さんになつたと云ふ事を聞いていよ〳〵私の想像が間違はなかつた事をほゝゑみました。

反逆の子となつて、Kが、あれからいつまでも都會にさすらつて居なかつたを事Kの爲に心から喜びました。華やかでなくても、靜かな、小やかな樂しみに充ちた家庭、それはほんとに祝福されたものでなければならぬと思ひました。

私は、すぐ手紙を書いて、父となつた喜びを祝つてやりました。結婚の時の樣に今度も心許りの祝の品も送りました。が其返禮に名產の鮭を送つたと云ふしらせは珍らしくKの父親の名で來ました。私は侮辱された樣な寂さを覺えました」

「偶然の機會で私が再びKと遭ふ樣になつたのは、私がある夏初めて脚氣を病んで、Kの故鄕に私の叔母の家があるのを幸ひ、其處に轉地する事になつた時でした。私は其地に着くと、二三日してKの家を訪ねました。そして、まだ見ないKのお嫁さんとお友達にならうと思つて行つたのでした。

Kの新家庭は私が想像して居たのと全く違つて、外目にも何となく落着のないものでした、お嫁さんと云ふのも赤いてがらか何かの初々しい可憐な姿を描いて居た私には、全く意外な、ハイカラな人でした」

「それも、行つた時、直ぐには挨拶に出て來なかつたのですけれど、私が暫くKと話をして居るうちにお母さんがお菓子を持つて來たりしてすゝめますから、私から紹介して下さいとお嫁さんに逢ふ事を求めたのです。

其くせ、さつきから時々、こつちの樣子をのぞいて見たりする若い女の人の姿が簾越しに見えたりしたもんですからね。

やつとの事でお嫁さんが出て來て、ギゴチない挨拶をしましたつけ。私は、そりやなれなれしくうまく挨拶したつもりでした。そして、其人も東京の私立女學校で修業したといふので學校の話なんかもしましたが、Kは、お嫁さんが出て來てから厭に固くなつて、面白さうに話もしませんの。

お嫁さんもぢき忙しさうに臺所に引込んでしまひました。

私はね、もう家庭を作つて親になつて居る人を自分と對等に若々しく考へたりしませんでしたよ。私はまだ將來のある身でしたもの、それに變なお嫁さんのそぶりが可なり不愉快でしたし、Kの老成ぶつた、寂しい調子も、二度と私の足を其家に引きつける力がないのでした。私は近所の子らと一緒に遊んで其夏をくらしました。」

「そろ／＼殘暑が終つた頃、私はまた東京の人にならねばならぬと思つて居ました。其時、突然の都の便りが私の旅の支度を更に早めさせました。

それは、私の緣談でした。

全く偶然なのです。不思議な樣な話でしたが、其話の相手といふのが、公用で丁度私の行つて居た其町に出張するといふのです。で會見するといふ事になつたのですが、左樣した突然の込み入つた話は、今此處に必要がないから省きます。とも角私は一度其人にも逢つた上で、東京からの申越通りに早速歸京する事に極めたのです。そして、Kの家にも暇乞にゆきました。

私はKに歸京する樣になつた事を話しました。勿論結婚問題などは云ひ出しませんでした。然し、思ひ懸けなくKの口から『お目出度いのださうで、結構です』と云はれました。私はビックリして眼をみはつてKの顏を見つめて居ますと、『私の中學時代の友達に法學士がありまして、其人の所を時々訪問したのです、そしたら其法學士の親しいお友達ださうで、今度の話をすつかり伺ひました』と說明する樣にいふのでした。知られて居るからは仕方がないと思つて『でも、まだ極つた譯ぢやないのですから』と何故ともつかぬ返事をして居ますと、

『大變に有望な方ださうです。御良緣だと思ひます』と私に決心を促す樣にいふのです。

左樣いふ事をKの口から聞かされた時に、私は何故か、涙ぐましい氣持になりました。

私は、田舍に引籠つても、昔の儘のキリッとした目鼻立に引きつけられる樣に眼を注ぎました。何處にも一點の邪氣もない、いかにも高潔な人格を偲ばせるKの風貌が初めて私の頭にハッキリと、忘れ難く印象されました。」

都會の華やかな空氣とか、世間的の地位名譽、そんなものが私の頭をもし支配して居なかつたら、もしかしたらとうに私は此人と靜かな生活に入つて居たかも知れないといふ事は有り得べからざる事では無かつたのだ、とフト思ひました。私を左樣した方に近づけなかつたのは私の虛榮心でした。だが「本當のもの、」それをのぞいて上つ面の幸福とか喜悅とかいふものにどれほどの價値があるのでせう。私は今迄見た事もきいた事もない全然路傍の人、單に仲介者の言葉を信じて結びつけられやうとして居る候補者の法學士がKよりどれ丈價値多いのかといふ事を考へたら正直な話が心細く感じないでは居られませんでした。

私は急に、結婚が恐ろしいものに思はれて來ました。そして又、もう嫁いで了へば、これきり遭ふ機會もあるまいと思はれるKとの會見の時間が容赦なく過ぎてゆくのを惜しい樣に思ひました。」

「其日は恐ろしくKは雄辯でした。彼の在京時代を思ひ出させる樣に、それは〳〵活き活きとよく語りました。どうかすると私の方が憂鬱(メランコリー)に閉される樣でした。

お母さんがまくわ瓜などをむいて出して呉れました。其日はお嫁さんは三里程離れた實家に泊りがけで行つて居ると其時お母さんが話しました。

『これでもう、いつお目に掛れるかわかりませんね』とたうとうKがいひ出しました。

『御幸福な奥樣におなりになる事を遙かに祈つて居ます』といひ切つた聲が男らしくサッパリときこえました。

それを平氣で笑つて應けいれるには、私の心は少し不純な樣でした。私には、私の眼の前に落着いて

坐つて居るよりも、何年か前の情熱に燃えた若いKの眼ざしがハッキリと浮びました。
『虛榮の女』左樣いはれても仕方がない私に、斯樣した淸い餞(はなむけ)の言葉を贈られるのは苦しい事に相違ありませんでした。

私はたうとう『今日は何となく悲しい樣な氣分になりましたわ』と正直にいひました。

Kはそれには一言も答へないで、眼を反らせて、庭の草花をみつめて居ました。

たうとうそれで別れました。

私が立つ時、停車場にはKは來ない校用で――Kは中學校に勤めて居ました――來られないからといつてお母さんとお嫁さんが土地の名物のお菓子を持つて見送りに來ました。

『何卒Kさんによろしく、御身體を大切になさる樣に』と傳言けて、私は再び都の人となりました。

「それから私は豫定の通り結婚しました。そして主婦となり、母となり、世間並に、何もかも知る樣になりました。

　Kですか、それから二人目の子が生れたといふ事をきゝましたが、其後胸の病をわづらつて、さん〴〵轉地した後に三年程前に逝(なくな)つたさうですよ。

　長い話をしてお千賀さんは、冷えた紅茶をすゝつた。

「その方が忘れられない方なのね」とチット一心に聞いて居た私が初めて口をはさんだ。

「何だ、それつきりかと御思ひになるでせう。でもね、これはKのお母さんが人に話したといふのを叔母からきいたのですけれど、あのお嫁さんはあんまり可い人ぢやなかつたのですつて、そして、お母さんがある時、『もしも千賀さんがうちに來て下さつたのなら彼れもどんなに仕合せだつたでせうに』つて淚をこぼして話したのですつて。Kは私や私の周圍のものには一言だつてそんなそぶりを見せなかつた

んです。いひ出されなかつた丈け、私は無關心で振舞つて居られたけれど、私はそれをきいた時に初めてしみじみＫに對しての慕はしさを深く感じさせられましたの。

私は、年とつて、だんだん男性といふものが解つて來ると同時に、あゝしたＫの高潔な態度がたまらなく尊いものに思はれますの。

一言も打ち明けられなかつた戀、それは永遠に形となつて現れなかつたのですけれど、尊い、美しい一つの心となつて私の胸には消し難い影を殘しました。」

「お可哀相にね、其方」

私もつい引き入れられて了つた。そしてフト

「で製本なさらうつて云つた御本はそれつきりになつた譯ね」と尋ねた。

「それつきりよ。どうしましたかね、實家に久しく預かつてあつたのですが、私もきいても見ないけれど…………」

お千賀さんの顔が急に寂しく曇つた。

「私ね、Ｋの事を思ひ出すと、ほんとに、美しいさびしいなつかしさを覺えるのよ、イヽエ、私があの人を戀したんでも何でもないのよ、それは初めにお話したでせう、只默つて去つて、默つて結婚して、そして默つて逝つた人の心の底の美しいひらめきを、どうしても忘れる事が出來ませんの、忘れないのが、あの人への萠えなくて終つた戀の記念だと思つてゐるのよ」

「何だか詩的なお話ね。でもあなたの其お心持は私にも、ようく解る樣な氣がしますわ」

「Ｋの家族は今どうしてますかしら」

お千賀さんはそれからそれと色々の事を考へて居るらしかつた。私は今幸福な奥樣になつて居るお千賀さんの横顔をぢつと眺め乍ら、全く未知の、柔和な一人の青年の姿を心に思ひ浮べて居た。（十、六、九）

協會日誌

（六月一日より――二十五日迄）

六月一日(水)　丁度一ヶ月あまり、會員兒玉眞子さんの御好意で同氏の御宅の一室を事務所にあて、ゐたがやう／＼新事務所を見つけたので明日は引越の豫定。いそ／＼と急の用事をすます、總務についての在來の會員全部へハガキを出す其の前に開くべき評議員會の事で評議員へ案內狀を出す。

六月二日(木)　今日引越、夕方までかゝつて荷物の整理を終へる。今度は貸事務所風の明るい建物で室は小さいけれども靜かなのが、みんなをよろこばせた。

六月三日(金)　新事務所第一の仕事は、永い間の落ちつかない氣分が仕事の上にたくさんの落度をこしらへてゐるのでそれの整理を急がればならぬ。

六月四日(土)　觀劇會の後始末が中々わづらはしい。遲ればせ乍らやう／＼方々へお禮狀を書いて出す編輯の矢部氏相變らず一人でかけまはつて、疲れた身體を事務所に現して皆に元氣づけられて又訪問やら何やら多忙、田島さんも又日の廻る樣なあんばい。

六月五日(日)　平塚氏が花挿の壷と額を持來らるやう／＼和らいだ室になる。

會務部通信

支部消息

大阪支部

總務理事　關口愛子

五月報告

浦濱氏は雜誌だけ購讀なさるさうです。

正　浦濱ふみ氏
正　楠原はつの氏　退會（四月十六日）
正　濱野菊榮氏　退會（四月十九日）
正　佐藤富子（大阪東區大手通一ノ十九）
正　寺田アサ子（大阪府下豐能郡豐中新市街）
以上二名入會（四月廿五日）
一種　足立民子　退會（五月五日）
正　吉松素江　（同　日）
正　永木とく氏　正　正富中子氏　退會（五月七日）
正　高津菊子氏　退會（五月十八日）
維　床次正廣氏入會
（大阪府下住吉常盤樹園內）（五月廿一日）

ぼつ／＼退會者が出て參りました。それが大抵小學校教員です。或は學校からの壓迫ではないかとそれとなく調べて見ましたけれど私の耳に這入つて來た處ではさうでもなささうです。それでいろ／＼研究して見ました處が、それは今春の講演會へ出て見て確信なくたゞ衝動的な好奇心にうごかされて入會した人達で此頃になつてほとぼりがさめて暇が來たのを引續その會費の催促に愈々その氣になつて退會して行くこと、思はれます。中には斷じて雜誌を送られては困るなぞさえらい權幕で申して來るのもあります。然こんな不健全分子は協會のためは却つて早く退會してもらつた方がいゝ位に考へます。自分としては今の處少數でも出來るだけ確りした會員でかためたいと思つて居ります。

六月報告

總務幹事　關口愛子

毎月二回宛發く茶話會、研究會の會場に隨分困難して居りましたが今度當市天神橋筋六丁目に市民館が建設されまして低廉な貸借料で各種の會合に開放される事になりましたので開館前（六月十九日開館）六月四日、原田、關口、兩名にて交涉に參りました。館長の志賀氏に面會して御願ひました處早速に快諾されましたので六月の第二土

規約の改訂にて皆で研究討議する。

六月六日（月） 引き續き規約の改訂につき一同協議。正會員會費の事も、かなりに問題になつた十時過散會。

六月七日（火） 規約の事は奥氏に一任する、手紙の返事や會計の整理、雜誌の帶封など書く。上村つゆ子氏來訪手傳つて下さる。

六月八日（水） 今日は總會について評議員會を開く。規約の改訂、役員の改選、十年度豫算研究部各部の報告について、その他數件に渡つて協議をする、出席者市川・奥 田中、塚本、平山、平山、坂本、平塚 矢部・山田、田島の諸氏。佐々木數日來神經痛にて臥床。

六月十日（金） 田端の平塚氏のお宅で奥佐々木で總會についての細かい相談をする、各新聞社へも通知。

六月十一日（土） 明日の總會について打ち合せのため事務所へ集る、出席者、山田、坂本、塚本、奥、平塚、田島、矢部佐々木、夜十時迄。

六月十二日（日） 午後一時半の豫定が二時になつていよ／＼總會開會、別項の樣に進めて行く。雨天で約束の人達も見えず豫定の三分の一もなくて淋しい集りであつた。閉會後二十人晩餐會にうつり、一品の菜菓をとりつゝお互に打ちとけて話しあふ。中々各自の熱辯雄辯も聞かれ

曜の茶話會研究會から市民館で開く事にいたしました。爾後特別の場合の他は何時も同所で開く事にいたします。

六月十三日 茶話會、第四研究會を市民館に於て開催、出席者十四名 茶話會には支部の將來に關して會員の御意見を伺ひました。事業としては手近な事からかゝる事にして先づ京大阪市の婦人會の聯合を計畫し追つては京阪神三都の婦人團體の聯合を計らうではないかといふ意見に一致いたしました。研究會は夫婦財產制の條文に就ての研究し、その條文に就ての質問と親族法論の講義とを入江講師から聽講いたしました

六月廿三日 午後三時から市民館に於て第五回研究會を開きました。

出席者十一名

能力、離婚、實子養子の二款終迄等の各條文に就て研究質義は次回講師に質す事にして會を終りました。それより懇談に移りて前茶話會の時會員の意見さして提出された大阪婦人團體同盟の計畫を具體的の運動に移す事と決議いたしました。

神戸支部

石原巨子さんから左の如き御手紙が參りました、御氣の毒に堪へません、十分御靜養下さいますやう御願ひ申上げます。

「七日は御手紙一々拜讀致しました（床の中より）二月以降私の腦非常にあしく其結果耳が大變遠くなり時々氣分が變でまとまりませんので乍殘念尾本憲子姉へ御願ひして萬事まとめて下さる樣にして御座います。そして會計の方は曾井姉へ委細報告致して御座います 二月から度々諸方へ旅行いたし又病床にて萬事思ふに任せぬのは殘念至極で御座います」

こんなわけで今後は全務は幹事の尾本憲子さんが、會計は曾井哩子さんが御引受け下さることになりました。

總會記事

豫定の通り六月十二日午後二時から丸之内中央亭で十年度總會を開きました、集つた會員は婦人三十二人、男子六名、豫め頂いた御返事よりは三分の一程減じてゐて淋しい會でした。丁度梅雨に入つていやな天候であつた事も原因してゐたやうに思はれます。

て樂しく十一時散會する。

六月十三日（月）　雜誌發送の日、平塚氏塚本氏、八田氏等が四分の一程の發送をして下さる、八田氏は總會に姿が見えなかつたので皆で案じてゐたが、通知漏れであつたさうで申わけなく思ふ。

六月十四日（火）　みんな出勤殊に田島さんは昨日の埋合せに割引電車で驅付けて發送をつゞける。おくれておわびの仕樣もない樣な心持で佐々木氏が出て來る、田島さんの昨日のお休みの話を聞いてホツト思ふ、つかれた友達を見出した時やつと安心とはなかしいと大笑ひ。塚本氏の知人が八百冊程の分を一とまづ運び出して下さる。

六月十五日（水）　相變らずの雨に氣も、心も、しめりこんでしまふ、山の樣な殘りの雜誌を又發送する。矢部氏奥氏も廣告取りの歸りに寄られる。

六月十六日（木）　協調會の人達が來訪、平塚、奥、兩氏も出勤。理事會も研究部會も開きたいと相談をする。雜誌が足りなくて、讀者に配本し切れないので田島さんが大汗になつて心配。再版をしやうと印刷屋に電話をかけると解版してしまつた由にて全く困つた。

六月十八日（土）　平塚氏家族の方の御病氣で休、田島、佐々木、相變らず忙しい、今日は新會計係稻垣さんが見えられる。

總　會　順　序

開會の辭
會長推薦
會長の挨拶
研究部各部の報告
　社會部
　　政治法律部
　出版部
　敎育部
　會務部
九年度の會計報告
研究部の組織變更と部員所屬決定役員の選擧
　　　お　　　茶
　研究部各部會、幹事選擧
一、役員の挨拶
一、常人理事の挨拶
一、十年度の豫算
一、資金に關する提案
一、支部に關する提案
　一、支部役員に對する慰勞の件
　二、支部役員有給の件
一、市川石原兩女史を特別會員に推薦する件
一、支部よりの提案
一、會員よりの提案
一、閉會の辭

まづ司會者奥むめおの開會の辭に始まつて、推されて山田美部子氏が會長となり、條を追つて進行して、提案は全く可決されました。研究部各部の報告と九年度の會計報告はこれまで雜誌の上で毎號お知らせして來たものを纏めたにすぎませんからこゝに繰返しません、研究部は新規約に依つてその組織を變更して各自が所屬を決めました、何しろ出席者が少なかつたのでその他の會員からも所屬部名を指定して頂いてから纏めて發表する事にいたします。役員の選擧は初め一般投票にする心算でしたが多數決によつたが委員附托になつて別記の如く選出されました。資金に關する提案とは、一日も早く協會を財團法人の組織にするためにどんな方法をとつたらいゝかといふ點と（これは具體的には未だ決まりませんでした）現在の豫算では（別項參照）毎月一七〇圓程づゝの缺損を見る事になつてをります、出來る限りに削減して作つた豫算さへ立行かない程の現在の協會が、さしあたり如何な方法でそれ等を充たして會員を募る事が最も緊要な一事であり永續的に將來の基礎を固めやうかと云ふ點でこれはまづ協會の主義主張を宣傳して次には積極的にいろんな生産的事業を始めてその收益金を積立てることであるといふに衆議一決しました。

支部に關する提案の内一は、支部役員に

六月十九日（日）　新理事の積、草郷の兩氏來訪、元氣と熱心さでお茶をのみながら五時頃迄「一生けんめいでやりませう」と話しあふ。

六月二十日（月）　休日、永い間休日とてはなかつたので今日を休みにする。

六月二十一日（火）　矢部氏はもう七月號で大心配、奧氏も廣告で多忙。

六月二十二日（水）　午後六時から第一回理事會を催催左の事項について協議する一、會計監査田中芳子氏に振替貯金の協會代表者たるを願ふ二、理事會の集りの回數と其の時日について三、研究會組織と、その時日、四、協會の資金を得る方法について、五、計常費不足分の補ひについて六、會員との親睦のためとその方法について、その他細かい事について種々協議する、出席者、伊藤朝子、田中芳子、山田美都子、坂本眞琴、塚本仲子、佐々木伊都子、の諸氏、平塚・奧、矢部、田島の諸氏は病氣その他で缺席。十一時半散會。

六月二十三日（木）　田島、佐々木、稻垣氏も出られて新らしい帳簿をせつせと書いて居られる。

六月二十四日（金）　久しぶりの好天氣がすつかり人の心持を變へてしまふ、戀から見える通りを歩く人の輕快さもうれしい、手紙の整理で一日は終はる、田島さんも、雜誌の返送やその他の整理で中々多忙。

六月廿五日（土）　うつたうしい天氣である、七月號の締切りは會務報告のためにのび〱になつてすまない。あんまり報告が多いので、とても廻りきれない。今日も、そろばんを一日中動かす。頭の中がボーッとしてしまふ　（伊都）

て特に協の會ために御盡力頂く方々に本部として定期に相當の慰勞をする事で、二は、支部役員を有給にするやうに各支部に提案することです。その次の市川石原兩女史を新規約適用に依る特別會員に推薦する件は、一人の異議者もなく可決されましたが、列席の市川氏はそれを固辭されたので——その理由をして正會員でなしに特別な會員になるのがいやであること、後日又理事として働きたいと思つてゐることなどを云はれました——市川氏の意志に任せる事にしました。支部よりの提案は大阪支部からだけしか來てなりませんでした、それは「十年度事業として社會的實際運動に今迄傾いて來た精力を資金調達に全部傾けて十年度に協會資金といふものを幾分なりとも固定せしむる方針」と云ふのです。以上

會員よりの提案も地方に在る會員三名から頂きましたが、何れも採決の必要のない協會に對する注文でした。（こゝに採錄したいと思ひましたが、總會當日とり紛れて急に見出すことが出來ませんので後日にゆづります）出席會員よりは別に提案が出ませんでした。

閉會後會費一圓五十錢の晩餐會をいたしました。質しい皿に、舌鼓を打ち乍ら各自がきはめて自由にその思つてゐる事を話し合つてまことに愉快な會合でした　（むめお）

五月の會計報告

△收入の部

收入總額	一、一〇〇、一二
內譯	
會費	二四六、九三
寄附金	一七一、二〇
觀劇會利益金	五一〇、三三
前月繰越高	一七一、六六

△支出の部

支出總額	七五一、三六
內譯	
俸給の一部	四七、——
事務所費（家賃を含む）	九四、九九
通信費	一八、一二
辨當代	四七、二二
臨時費	一三、七五
返金及利子	二〇七、八四
消耗費	八二、三七
振替料金及用紙代（四月分未發表の分も含む）	二一、五四
電車及俥代	三三、二二
（特別支出觀劇會特別支拂）	一八五、三一

編輯だより

▽隨分苦心しましたのに今月もまた遅れてしまひました。實は印刷所にもありますがその大部は原稿の遅れたためでありましたので、早く送つて戴いた方に對しては申譯がありません。私は一人でかなりやきもきしましたのでしたがこんな結果になつてガツカリしてしまひました。でも内容だけは相當に面目を改め得ましたかと窃かに喜んでゐます。

▽會員の方及び一般の讀者諸氏からの御寄稿を歡迎いたします。論文、研究、時評、感想、詩歌、創作、何に限らずどし〲御寄せ下さいますやう改めて編者よりお願ひします。本誌は會員諸氏並に愛讀者諸氏によつて利用し發展させて行つて下さる義務があると信じます。どうぞ他人の雜誌と思はずに下さい。

▽御約束通り會員原も二三日遅れて會員の方に配布出來ることになりました。

▽市川さんもいよ〲この二十九日にお立ちになることになりました。彼の地からも通信を送つて下さるといふので、あちらの婦人達の目醒しい活動ぶりも詳かに知ることが出來るであらうと喜んでゐます。

▽梅雨が霽れると同時に、急に炎熱が襲つて參りました。虎疫が東京へ侵入しかけたといつて一時戰々恟々の有樣でしたがどうやら喰ひとめ得たやうで安心ですでもいろんな病氣の起り易い時ですから御自愛下さい。

▽梅雨霽れといへば、丁度それと同時に東京市の大疑獄事件の豫審決定書が發表されて、市民の頭上にうろついてゐた暗雲の一部が掃きやられました。しかし今日のやうに物質主義、金權主義の跋扈してゐる時代では、あんな事はむしろ當然で、免れて恥なき徒輩が社會に充滿してゐることを、自覺する必要があります。いつになつたら光風霽月の社會と政治とが實現する事か、今の所まるで見當もつかないではありませんか。私共の奮起を促す材料は私達の身邊を一杯に取り卷いてゐるではありませんか。

▽とにかく自然の梅雨は上つて、烈日の下に滴る綠の林は自由の歌を青嵐の波に送つてゐます。省線の停車場には旅をそそる海のポスターが目につきます。ブルジョア式の避暑とはいはず山の自由と海の快濶の氣に一年に一度ぐらゐは浸りたいものです。と同時に常に山海の自由郷に住まる方は、都會の血腥い生活戰場を訪ねらるゝこともまた無益でないかも知れません。休暇もつ方は有意義に御過しなさいませ。（はつ）

定價表

一部　金三十錢（郵税五厘）
半ヶ年　金一圓七十錢（郵税共）
一ヶ年　金三圓三十錢（郵税共）

廣告料

特等　一頁　五十圓
一等　一頁　四十圓
二等　一頁　三十圓
　　　半頁　二十圓
四回以上割引あり

注意

▼御注文は總て前金で願ひます。
▼御送金は振替に御拂込み下さい。
▼郵券代用の際は一割増の事。（五厘切手にて）
▼誌代の領收書は雜誌發送を以つてかへます。
御入用の方は端書封入下さい。

大正十年六月卅日納本
大正十年七月一日發行（第十號）

編輯兼發行印刷人　奥むめお
東京市麹町區内幸町一ノ六

發行所　新婦人協會
電話銀座三九二二番
振替東京五〇九〇〇番

賣捌所　東京堂　東海堂　北隆館　上田屋　至誠堂　其他全國各書店にあり

新婦人協會 規約

第一條 本會は新婦人協會と稱し、事務所を東京市麴町區内幸町一ノ六々村自動車部内に置く。

第二條 本會はその綱領に從ひ、婦人相互間の團結を計り、婦人擁護のため、其進歩向上のため、或は利益の增進、權利の獲得のために努力せんことを期す。

第三條 本會は第二條の目的を達せんがために、左記各事項中最も緊要と認めたるものより着手し漸次其の全體に及ぶ。

一、女子高等教育、小學大學の男女共學、普通教育女子教育の改善、女子教育者の待遇改善、婦人參政權、婦人に不利なる諸法制の改廢、兒童保護、母性保護等の要求をなすための實際運動を開始す。

一、各地の有力なる婦人團體と連絡を計り、婦人共同の利益に對する日本婦人聯同盟を組織すること。

一、婦人に關する諸種の特種問題研究調査會を設くる事。

一、婦人問題、勞働問題、生活問題及其他諸種の社會問題に關する講演會を各地にて開くこと。

一、機關雜誌「女性同盟」及「會員版」の發行。

一、婦人勞働者の教化機關として學校を設置し、婦人勞働新聞を發刊し、健全にして實力ある婦人勞働組合を組織する基礎を造る事。

一、婦人身上相談、職業紹介、結婚媒介。

一、女子大學講座の開設。

一、事務所、公會所、教室、婦人共同寄宿所、婦人簡易食堂、娯樂所、運動場、圖書館等を含む婦人會館の建設。

第四條 本會に左の二部を置く。

一、會務部――會計、通信、機關雜誌、

一、事業部――研究部、社會、政治法律、教育、家庭、文藝
出版部、

第五條 本會々員を左の四種に分つ、

一、正會員

一、特別會員

一、贊助員

一、維持員

第六條 正會員は本會の主義精神に贊成して入會したる婦人を云ふ。正會員の會費を一ヶ月金五十錢とす。

第七條 特別會員は イ、本會に特別の功勞ありたる者 ロ、各婦人團體の代表者 及び ハ、智識又は勞力を以て本會の事業を援助する男女にして、本會理事會にて推薦し其の承諾を得たるものを云ふ。

第八條 贊助員は本會の趣旨に贊成し、本會の事業を援助する男女にして、會費一ヶ月金一圓以上を醵出するものを云ふ。

第九條 維持員は本會の趣旨に贊成し、本會の事業を援助する男女にして、會費一ヶ月金五圓以上、若しくは一時金五百圓以上を醵出するものを云ふ。

第十條 會員は全部機關雜誌「女性同盟」及び會員版の配布をうく。

第十一條 本會に入會せんとする者は、住所、職業、年齡、姓名を明記し、會費を添へて申込むべし。但し正會員は別に入會金々一圓を要す。

第十二條 本會の會費は全て一ヶ年宛前納とす。但し分納することを得。（正會員に限り前納一ヶ年金五圓半ヶ年金二圓五十錢三ヶ月金一圓五十錢）

第十三條 本會に左の役員を置く。

一、常任理事

一、理事

第十四條 常任理事は若干名とし、理事會これを委囑す。常任理事は第四條に掲げたる會務を分擔するものとす。

第十五條 理事は若干名とし、正會員及第七條イ、項に相當する女子の特別會員中より互選す。理事の任期を滿一ヶ年とす。

第十六條 理事會は本會の運輸機關にして、會全體を總ぶ。理事會は一ヶ月二回以上を開くものとし、必要に應じては、何時にてもこれを開くことを得。

第十七條 總會は毎年一回春季にこれを開會す、但し必要の場合は臨時總會を開くことを得。

第十八條 本會の經費は會員の會費、會の收益金、及び篤志家の寄附金を以てこれに充つ。

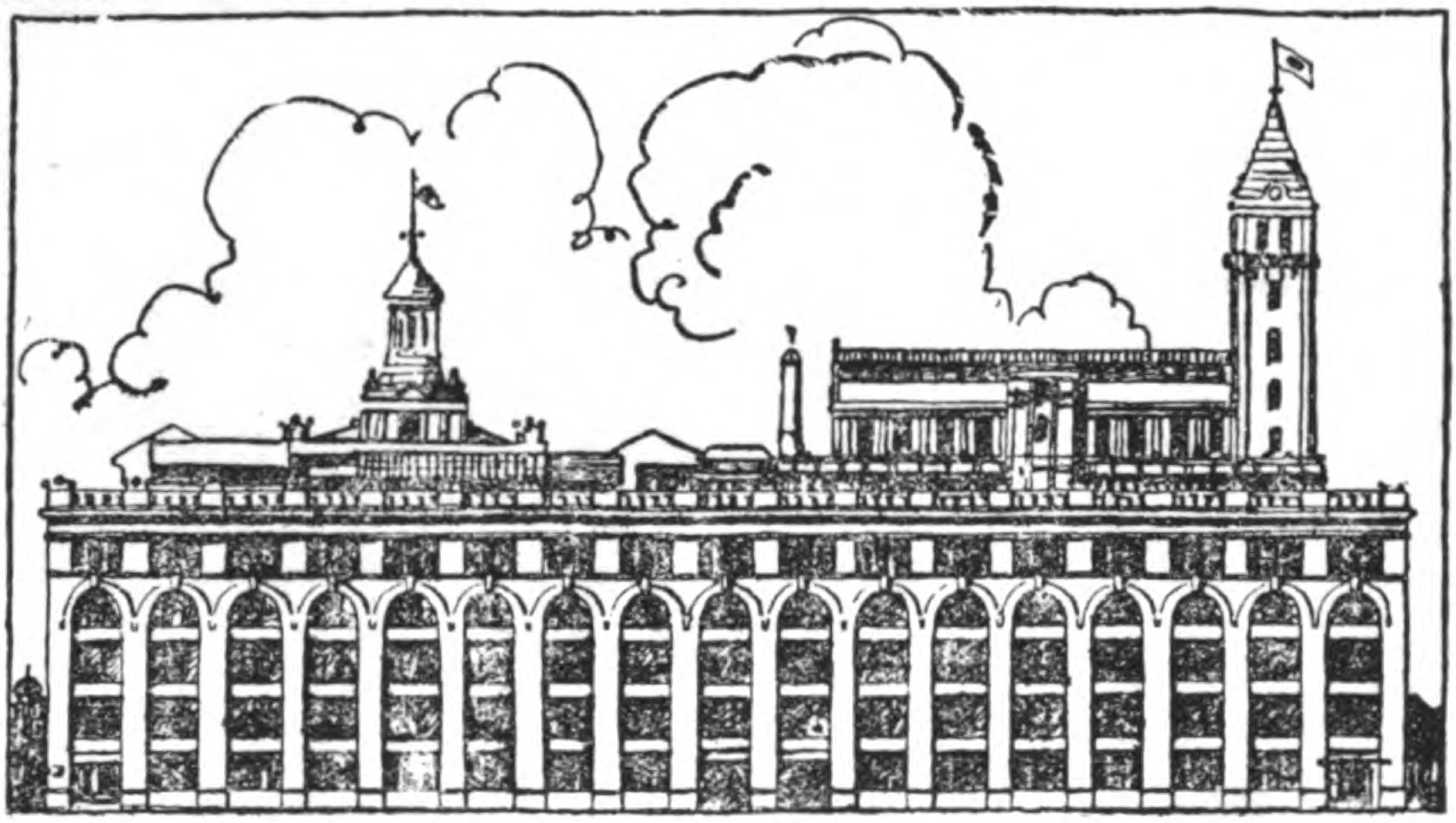
第十九條 本會の會計は總會にてこれを發表す。

第二十條 同一地方にて正會員五名以上を有する時は支部を設置することを得。

第二十一條 本規約は總會の決議に依りて變更すべきものとす。但し緊急を要する場合には本部及支部の理事會にてこれを決することを得。

第二十二條 細則は別にこれを定む。

（以上）



(駿河町通りより見たる三越呉服店全景)

三越の増築成る

三越西館の増築玆に竣功し、六月廿六日愈々開館の運びに至りました、東西両館を通じて總坪數實に八千坪、昇降機の設備九個、エスカレーター八基、特に西館は地下室と一階の外は悉く複線とし、昇降頗る便、食堂は従前に比し二倍半に擴大され、しかも七階のトップ、ライト展觀場に至りてはスエズ以東他に其比を見ざる新設備で御座います、大正三年現在の東館成つて、こゝに僅に七ヶ年斯くの如き大發展を爲し得ました事は偏に大方御華客様方の御引立の賜に外ならぬのであります、此機會に於て謹んで御禮を申上げます。

建物の擴大に伴ひ、在來各部の内容を充實致します外更に樂器部、運動具部、藥品部、東洋品部、圖書部等を増設し、益々御華客様方の御便利を専一と致し、社會奉仕の一端を盡したいと存じます、何卒倍舊の御高庇を賜はり、開館當日より賑々しく、御來店の程偏に冀上げます。

第九回
兒童博覽會
七月一日より
八月九日まで

東京

三越呉服店

大正十年七月一日發行　大正十年六月廿日印刷納本　女性同盟七月號　（大正九年十月一日第三種郵便物認可）



定價（一部）參拾錢（稅五厘）
發行所　東京市麴町區内幸町一ノ六　振替東京五〇九〇〇　新婦人協會